

---

# 猫の肉球！～ねこのにくきう～

黒川志紀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

猫の肉球！〜ねこのにくきう〜

### 【Nコード】

N0337D

### 【作者名】

黒川志紀

### 【あらすじ】

【ホームページく小さな黒い幻想より】大学生の冬樹は、ひよんなことからイギリスへ。同行する女の子で後輩かつヒロインの香織と二人っきりの旅行のはずなのに、当然のごとく問題発生！

## パート1〜3

1

『トンネル抜ければ、そこは雪景色！』を、期待していたのに……。

トンネルを抜けた俺が見た景色は、ちょっと白いものを載せた緑色の木々と、それを満載している山たちだった。空には暗雲が立ち込めていて、太陽の光のほとんどをさえぎっている。

ちよつとだけ窓を開けてみた。がたんがたん電車が進む音の他には何も聞こえない。空気は、吐いた息がすぐに真っ白になるくらい冷たい。

俺は急いで窓を閉めた。この電車は個室タイプなので、あまり開けているとすぐに寒くなるからだ。それでもボロで暖房の力がいまいちだから、すぐに寒くなる。

と。そのわずかな寒さに反応したのか、目の前の長椅子に横になって毛布に包まれている香織が「んんう」という声と共に寝返りを打った。

俺は思わずドキツとした。こんな狭い個室の中で、女の子と二人つきりというのがまず生まれて初めてなのだ。これは、女の子と手をつないだ事も。ましてや会話すら口クにした事のない青少年には、とてもドキドキわくわく物ですよ！？

その瞬間俺は我に帰って、急いで鞆を開いた。そして、ふもとの村で買っておいた恐ろしく辛いガムを口の中に放り込む！！（ぐっああああ、か、辛い！！）

落ち着け俺。紳士になれ俺っ！！

……ふいー。

すっかり落ち着いた所で、改めて香織を見してみる。

はつきり言って、かなり可愛い方だと思う。美人……ではない。

単純に『可愛い』。

記憶が確かなら、香織にはファンクラブ（非公式＆非公認）が存在する。

香織は見た目だけでなく性格も良く、成績は特に秀でてはいないものの全体的に高い。スタイルも……悪くはない。むしろ……（激辛ガムを口の中に放り込む）ギャー！！

口の中には二つもガムが。どうも俺は辛いものが苦手なんだが、よく今耐えてると思う。香織は起きる様子がない。良かったと思いつつ、涙をぬぐう俺。嗚呼、男だよ俺。

そんな香織と俺が、何故二人つきりで電車に乗っているのか。それを説明するためには、まず俺が何のためにここ、イギリスに来たのかを説明しなければならないな。

俺はとある大学の三年で、西洋魔術とかヨーロッパの妖精などを主に研究している高橋教授の下で研究している。ちなみに香織は二年生で、来年から俺と同じ高橋教授の下で研究する事が決まっている。

で。俺がいつものように文献の整理をしていると、突然高橋教授から依頼を受けた。

『イギリスの、この、そうこの村に行つて、ちょっと遺跡を調べてきて欲しいのだよ。どうやら、私の考えが正しければ、この村に何か魔術文化のヒントがあるハズなのだよ。そこで、だね。ちょっと冬樹君に調べてきて欲しいのだよ』という感じで。話によると、教授には古くからの研究仲間（確か、トーマスとかいう名前）がいるらしい。そして十年前、その人がこの村の近くの遺跡を調査しに入つて以来、突然行方不明になつて

しまつたらしい。話によると、村にはちゃんと到着していて、しかもその村の近くには崖も何もないのだという。そこで、これは何かある、と思い立つた高橋教授は、遺跡の調査に行こうとした所、突然高橋教授に大仕事が。冬休みの間に行こうと思っていた教授は、すでにホテルの予約や飛行機の手ケットなどを入手済みだった。だけど冬休み中には終わりそうにもないから、せっかくだから（もっ

たいたないからとも言っ)誰か  
向かわせようと思ったらしい。

で、俺の名前が浮上した、と。

お金は教授が全額支給するらしいし、依頼という形だから給料もあるし、昔からイギリスに言っってみたかった俺は、別に深く考える事もなく了承した。

とそこで、出発寸前に思わず誤算が生まれた。

俺は、英語がどうも苦手なのだ。いや、文献のような文章の読解とか論文を作成するのは大丈夫なんだ。けどどうも日常会話が苦手だという、典型的な日本人なんだよなあ……。

そこで急遽英会話が得意な人を探そうと、高橋教授と廊下を猛烈ダッシュした所、英会話の先生とぺらぺらに会話する香織を高橋教授が発見。

同じ学科＋来年配属予定＋英会話が得意＋同じクラブ(魔法倶楽部)で俺と仲が良い＋生徒だからコストがあまりかからない。

高橋教授は『これはお得だ』と判断&香織に急遽通訳を依頼。香織は喜んでこれに承諾。

思えば、それからが大変だった。元々香織と仲が良かったために多少ファンクラブからの攻撃はあったが、それが少々エスカレート。学食で定食を頼んで食事をしていたら味噌汁に辛子を大量に投入されたり(馬鹿みたいに辛かった。そして何より、味が中途半端になっって不味かった)、俺の椅子に画鋲が大量に刺さってたり(抜くのが大変だし、椅子がボロボロになるため上向きにおいてあるのより悪質。啞然としている所を高橋教授が目撃。気がついたらカウンセラー室に呼ばれたりした)、剃刀レターが机の上にあったり(幸い、手紙を空ける前に偶然気がついたため怪我は無かった。文句なしで問題に)、エトセトラエトセトラ。

ただ、出発の1週間前には騒ぎは沈静化した。なぜなら、何かある度に香織が心配して飛んでくるようになったからだ。どうやら、逆効果だと判断したらしい。

そうして静かになってから、出発（空港で感じたあの殺気は、間違いなくファンクラブ

の奴らだ）。

ロンドンに到着後、休む間もなく電車の乗換えを幾度も繰り返してやっとの事でキングス・クロス駅に到着（9番線と10番線の間の柱に不思議そうに何度も手を押し付ける香織を見て苦笑い）。

そして現在に至る。

ふと外を改めて見てみると、コンパートメントの窓から見える景色が少しずつ白に染まってきていた。

「雪が…」

大粒の雪が、まるで行き先の見えない未来を象徴しているかのようになり始めていた。

俺はおもむろにコートのポケットからタロットカードを取り出した。

高橋教授の助手をするようになると、必ず何かしらの占いを身に付けるように言われるのだ。そこで俺が選んだのは、この『タロットカード占い』。すでに六ヶ月も占いをしているから、ほとんどの意味はわかるようになっていた。高橋教授曰く、これが『魔法』らしい。

左手で椅子に広げ、混ぜるようにシャッフル。そして一つにまとめて、三つの山に分けて、一つの山に戻す。スプレッドを展開するのが面倒だったので、一枚だけを引いてみた。いわゆるワンオラクルだ。

カードは、『月』のカード。基本的な意味は、暗中模索。

おそらく、未来が見えない状態を意味しているのだろつと判断した。

俺は窓の外をまた見ながら思った。

ま、楽に仕事は終わらないだろうな。

雪は、ふり続けている。

午後四時、村に到着。周囲はすでに真っ暗だ。

イギリスの国土の真ん中らへんに存在するこの村では、緯度の関係で夜が始まるのがかなり早い。村の街灯は力強く光を放っていて、まるで自分達が太陽だと言っているようだった。ちなみに、この村の街灯の半分は太陽の明かりとほぼ同じ光を発しているらしい。科学って偉大だな。

村は、『村』と言うより『町』だった。山の中にひっそりと存在するこの村は村中石畳で、昔ながらの建物が数多く残っているため、写真家を始めイギリス文化研究者などがやってきている。さらに、この村の近くには上級者向けのスキー場も存在するため、ナイター好きのスキーヤーがチラツと大通りを見ただけでも5・6人いた。さらにさらに、パンフレットで呼んだのだが、最近温泉が作られたらしい。昔から源泉はあったのだが、それは水道などに主に使われていた。だが日本文化が外国に広がるようになって、これを温泉にすれば儲かると思った人がいるらしい。そこで開いた所、思いのほか大盛況。村の外からも訪れる人がいるぐらいだ。

まあ要するに、それなりに観光客がいるのである。村の大きさから考えれば、多すぎるぐらいだ。

そして何より、寒いッ！！

夜になるのが早いため、気温は下がりた放題。吐いた息がすぐに白くなつて蒸気機関車の煙のようだ。香織はさっきから「ううう、さむい……」を言い続けている。

俺は急いで駅出口でホテルの送迎スタッフを探した。大きな看板を両手に広げて寒そうに『Mr. Johnson』さんを探す人や大きく『Teambox of Dabun』と書いてある紙を両手で広げている人などの中に、大きく『Pr. Takahashi』と書いてあるボードを持っている人を発見。名前の変更が面倒だからって、高橋教授は人数が増える事以外何も伝えていないらしい。勝手に俺をプロフェッサー（博士）にしないでくれ。

と、その看板をじっと見つめている猫を発見した。オレンジ色の体に茶色のストライプが入っている、ちよつと太った猫だった。

俺は猫を特に気にするわけでも無く空を見上げている香織を呼んでから、ボードを持っている人に旅行用の大きなトランクを引きずって近づいた。

香織が何か言う（うーん、聞き取れない…）。

プレートを持っている人が何度か頷いた後、俺の方を見て「ニストウミーチュープロフェソタカーシ」と言って握手を求めたので、俺もとりあえず「ナイストウミーチュー」と言って握手した。それを見た香織の顔が思わず歪んだのを視界の端に捉えた。うるさいっ、英会話は苦手なんだっ。

その後香織がまた何度か会話を交わした後、プレートを持った人がホテルまでスーツケースを持っていつてくれることになった。

香織と俺のスーツケースを両手でごろごろ転がしていく案内人の後ろをついて行きながら、香織はくすつと笑ってから言った。

「さっき、」

「うん？」

「さっきこの案内人さんに、スーツケースを持って言ってくれるか聞いたら、笑いながら『重そうだから嫌だ』って言ったんです。だから、『もし誰かが私たちのスーツケースを部屋まで運んでくれたら、その人のチップは多くなりますね』って言ったんです。そして、突然『やらせてください』だって！！あはははっ」

「お前、そんな事言ってたのか…」

「だって、高橋教授のお金ですし」

そう言つて、香織はくすくす笑い始めた。それを見た俺は、表面上では笑いながら心の中で、英会話勉強しよう&香織って一体何者なんだ、って思った。

香織は、本当に楽しそうな顔をしている。

そして、気がついたころには猫はいなくなっていた。



ホテルには、すぐに到着した。

大通りから『21』と書かれた看板のある道路（ガイドブックによると、村の東にある広場から始まり村の一番西にある駅まで続くこの大通りには、北側のわき道には奇数番号が、南側の道には偶数番号がそれぞれつけられているらしい）に入って少し歩くと、ホテルがあった。横幅は普通の家と同じぐらいで、二階建て。看板には、猫の足跡のような模様と、筆記体の文字があった。「猫の肉球……？」って香織が呟いた。どうやら、このホテルは『猫の肉球』という名前らしい。古いタイプの建物だけど小奇麗で、ちゃんと手入れがされているようだった。二階の窓には植木蜂がぶら下がっているけど、一本も花は無かった。目の前にあるこの街灯は、どうやらただの電灯らしい。

大変そうにスーツケースを持ち上げて階段を上がっていく案内人の後ろをついて行きながら中に入ると、中はオレンジ色を基調とした小部屋だった。ライトの置いてあるカウンターが正面にあって、右に待合室のようなテーブルとソファが置いてあった。どうやらここはロビーらしい。

ちよつと息が上がっている案内人は何か言っていると、二つのドアのうち手前の方のドアに入った。香織に何なのか聞いてみたら、「オーナーを探してきます、だって」らしい。

少しの間椅子に座っていると、案内人ともう一人、スリムでナイスミドルなおじさんが現れた。『Christopher』と書かれた名札をつけている。クリストファーさんらしい。

クリストファーさんは香織と何度か会話して大笑いした後、今度は奥のほうのドアを開けた。そこに案内人が入って、後を追うように香織、俺、しんがりはクリストファーさん。そこは廊下で、左側には外が見える窓、右側には数字の書かれたドアがあった。廊下の奥には階段があって、それを上った。右に折り返すように進んで、一番奥の『203』というプレートのある部屋に到着した。

案内人が鍵を開けて中に入ると、そこには二つベッドが置いてあ

った。

「……って、同じ部屋なの!？」

「みたいですよ。他の部屋は予約で埋まっていそうです」

香織はにこにこしながら言い切った。

辛いガムを噛み締めながら案内人にちよつと多めのチップを渡し  
ていると、クリストファーさんが香織をからかっていた。そしてク  
リストファーが戸棚を指差しながら何かを言うのと、香織は真っ赤に  
なって何かを言った。

英会話、日本に帰ったら本気で勉強しよう。ガムの辛さで泣きな  
がら思った。

クリストファーがこの部屋を出ると、香織も「ちよつとトイレに  
行ってきます」と顔を真っ赤にしたまま言っ、出て行った。

俺は荷物を右のベッドに寄せてから、ふとさっき指差されていた  
戸棚を調べてみることにした。

一番上の戸棚を開けて………見なかった事にしよう。

急いでスーツケースを開けて、調査用の資料を広げた。遺跡の場  
所が書いてある地図にメモ帳、シャーペンとボールペン内蔵ペンを  
揃えた頃に香織は帰ってきた。

香織は俺が道具を広げているのを見て

「あれっ、先輩。調査は明日からですよね？」

と聞いてきたから、俺は

「予習みたいなもんだよ。ちよつと遺跡に行っ、行き方を覚えて  
くる」

と言った。

いや実際、そんな事は必要ないと思う。

でも何となく、香織と顔を合わせずらいから。本当の理由はそれ  
だけ。

「それじゃあ、私も行きます」

と言う香織を「いや、すぐに戻ってくるから大丈夫。それより、  
香織はこの村の言い伝えとかをクリストファーさんから聞いておい

てくれ。それと、財布も一応預けておく」と言って一人残し、俺は廊下に出た。

コート中にメモ帳とペンを入れて、慌てるように外に出る。

深呼吸すると、まるで雲のような白い息が出た。

そして、地図の遺跡のマークを見ながら思った。

まさか香織は……流石にそんな事無いか。

3

大通りを進み（車道は無い。車自体が無いから。だから、大通りなのにそれなりの大きさしかない）、広場に到着。そこから南に進む道に入って、6と書かれた小道に入る。

突然だけど、ここで一匹猫を見かけた。今度は白い体だけど鼻と足と尻尾の先が黒くなっている猫だった。猫は俺を見て一瞬驚いたように止まると、急いで駆け出していった。俺は悪人か。

しばらく進むと村はずれに出るから、そこを少しまっすぐ進む。村の喧騒が消えて、雪道を進む時特有のさくさくという音だけが聞こえてくるようになる。

「さむう……」

俺は思わずばやいた。これでも4枚重ね着しているのに、それでも寒い。っていうか冷たい。明日はもつと着てこない駄目か？

それからまた少し進むと、足元が安定してきた。遺跡の石畳部分に到着したに違いない。手袋でちよつと雪をどけてみると、そこには平らに慣らされた石があった。

俺はゆっくりと周囲を見渡してみた。すると、

「あつた……」

真ん中らへんで折れている柱を六本見つけた。それは正六角形の形に並んでいて、真ん中には腰ぐらいの高さの台座がある。台座には何か文字が書かれているらしく、遠目から見ても微妙な凹凸がすすかに見える。

俺はゆっくりと台座に近づいていった。読める文字ならいいんだ

けど。それでも、ルーン文字やヒエログリフの簡単な解読ぐらいはできるんだ。

俺は台座の横にしゃがみこんだ。雪を除けて俺は…絶句した。  
よめねえ。

それどころじゃない。今までに一度も見た事の無い文字だ。何処の文献にも書かれていない、全く新しいタイプの文字だ。楔形……に似ているけど、この区切り方は何だろう。中央に伸びる横の線が長すぎて、三つの部品を貫通している。とりあえず台座の雪を全部どけてみたが、文字のタイプは変わらない。そして不思議な事に、台座の上には円が一つ書いてあるだけで、他には何も無い。

俺は思わず興奮しながら、ふと思った。何故、『何処の文献にもかかれていなかったのだろうか』と。

遺跡があること自体は分かっているはずだ。だったら、調べられてもおかしくは無いはずなのに。

そういえば、高橋教授の親友だかのトーマスという人も一度はここに来ているはずだ。なのに何故、『何処の文献にも書かれていない』のか。

俺は思わず何かを感じて、立ち上がり一歩引いた。

もしかしたら、俺は立ち入ってはならない部分に入ってしまったのではないか。ふとそう思った。

調査は明日に回して、帰ろう。

そうと決まればすぐに離れようとした。だが。

「……足が……!？」

足が動かない。それどころか、体が動かない。

少なくとも、寒さのせいではない。それだけは確かだ。

その瞬間、俺は何故動けないのか理解した。

高橋教授は、ここに魔術文化のヒントがあると言っていた。つまり、『魔法の力があってもおかしくは無い』のだ。そしてトーマスの失踪。公開されなかった文字。そして、動かない体。そこから考えられるのは……。

俺は今、魔法にかかっている！？

そんな馬鹿な……魔法は実在したのか！？

と、突然。六本の柱から青白い光の壁が延びて、円とヘキサグラム（六方星）を作り上げた。そうか、あの柱自体が魔方陣だったのか。光が少しずつ強くなっていくといきなり俺の体が宙に浮いて、六方星の中心、台座の上の空中に浮かぶ事になった。ま、まずい。このままだと……最悪死亡、良くて意識不明の重態って所か！？

だって誰も『あの文字を持ち帰っていない』んだから！！  
「う、うわぁー！！　まだ人生を終えたくねえー！！」

思わず日本語で叫んだ。全く無意味だと分かっているながら。

ジェットコースターに乗って、意味も無く叫んでしまうあれと気分は同じだ。

と、視界の中に魔方陣以外の何かが映った。

魔方陣の外側でうめいているアレは……ね、猫っ！？

柱が発光を始めた。

猫は増え続けている。魔方陣の光で、猫の表情が見える。その表情は、悔しそうだった。

ふと気がついた。何処からか、懐かしいメロディーのようなものが聞こえる。これは一体……？

突然、俺の内ポケットにあったタロットカードがくパシン>という音と共に破碎した。な、何があっただんだ！？

そして、

柱から俺に光が伸びた。

天使の羽で包まれるような柔らかさと、冷たい炎で焼かれているような痛さと、まるで小さいころ母親に甘えた時の安心感に似たような何かを感じた。

そして。

光は突然消えた。

ゆっくり落下していくのを感じながら、ゆっくりと目が閉まるのを感じながら、俺は思った。

いったい、何が俺の身に起こったのだろうか。

そして、何故タロットカードは爆砕したのだろうか。

少なくとも言える事は、

俺はもう『何処の文献にも文字を載せる事は出来なくなった』という事だ。

背中が台座に着いたのを感じた瞬間、俺の意識は消えていった。

## パート4〜6

4

頭がぼーっとしている。

あれからどのぐらい倒れているのだろうか。

仰向けに倒れている体を起こそうとして、力が上手く入らない事に気がついた。

別にいいやと思った俺は、まだしばらくは倒れている事にした。とりあえず状況だけでも確認しようとしたが、目が、開かない。まるで、恐ろしく疲れている時みたいだ。

仕方が無いから、まだ倒れている事にした。

俺は何処で倒れているのだろうか。まぶたに映る影は、真っ暗だ。まだ祭壇の上で倒れているのだと思うたが、それは考え直した。祭壇は俺が大の字で寝れるほど大きくなかったし、何より全然寒くない。

少なくともここは屋内だろう。風を感じない。

そこでふと、もしかして帰りが遅くなった俺を心配した香織が遺跡に来て、倒れている俺を見て助けてくれたのだろうか。だとしたら、ここはホテルか？

だけど、それも違うだろう。もしホテルだとしたら、悪くてもオーナーがソファーに寝かせてくれるだろう。だけど、今俺が横になっっているのは床だ。

状況をつかみたい。

そう思った俺は、何故かひどく疲労している全身を動かして腹ばいになり、目を開いた。

驚いた事に、そこはどこかの屋根裏部屋だった。何故かホコリは溜まっていない。

うめきながら「ここ、どこだ…」と呟くと、近くで誰かが動き「父に連絡だ、急げ！」という若い女性の凛々しい声が響いた。す

ると横にいたと思われる人物が一人、軽やかに走っていった。

それとほぼ同時に、「調子はどうか？」という声が聞こえた。

どう考えてもこれは俺に対して言われた言葉だから、俺はとりあえず「全身がだるい」と応えておいた。

すると、「まあ、無理も無い。ところで、お前の元の名前は何か？」と聞かれた。

ふと、違和感があった。

元の名前？

って、どういう事だ？と俺は訊いてみようとして、その時嫌な予感がした。思わず

「なあ、俺は今どうなっているんだ？」と聞くと、女性は

「自分で見たほうがいいだろう。おい、鏡をもってこい」と言った。また、軽やかな足音がどこかへ走り去って、今度は割とすぐに帰ってきた。

俺は待っている間中、多少でも疲労を回復させようと目を閉じていた目を開くとそこには……

大きな鏡の破片を加えている猫と、鏡に映る真っ白の猫が見えた。

「っはあ！？」

俺が叫ぶと、鏡の中の白猫も叫んだ。つまりこれは……

「俺、猫っ！？何故か知らないがめっちゃ猫！？」

「落ち着け」女性の声。振り返ると、そこには予想通り猫が。

「うわーっ！！猫、猫と会話している俺は猫だから猫なんですね猫だったり猫かもね！？」

「ちよつと一旦落ち着け！！」

無理だった。

その後、数匹の猫に押さえつけられて俺はやっと落ち着いた。

「すまなかった。俺としたことが」

「いや、別にいい。話によると、人間から猫になった者はほとんど



混乱しているらしいからな。これも予想の内だ」

「……って事は、俺の他にも猫になった奴がいるのか？」

「ああ、いる。私の父がそうだ」

え。

「それって……」

とその時、屋根裏用の通風孔から年をとった猫が一匹現れた。模様は、オレンジ色の体に茶色のストライプ。

「やあ、やあ。起きたんだね」

「あ、あなたは今日駅にいた」

「ああ、あの猫だよ。正確には、昨日だがね。初めまして、プロフエッサー高橋の助手君。私はトーマスだよ」

「まさか……と、トーマス教授なんですか!？」

トーマス（元）教授は、楽しそうに「そうだよ。驚いたかね」と言った。

「そりゃ、驚きますよ。まさか猫になっていたなんて……しかも子供までいるし!！」

「ユキという名だよ。ほら、プラチナブロンドの毛並みが雪のようだろう。だから、日本語で雪と言う意味の『ユキ』。いい名だろう?」

そついう問題じゃない気が。

俺は『あの、残念ながら全部日本語で聞こえるんで後半は変な感じなんです』と言おうとして、気がついた。

「あれ、俺もしかして英語を話してる?」

何が言いたいのかを悟ったらしいトーマス（元）教授は、「いや違うよ。正確には、猫になった瞬間、どんな人間だろうと『猫語』を喋るようになるのだ。だから、私は英語を話しているつもりで、君は日本語を話しているつもりで、猫語を話しているんだ」と言った。

猫語。ネーミングセンスがまんまだ。

そつ思いながら、俺はとりあえず一旦落ち着こうと深呼吸してか

ら、思いつく限り質問を重ねる事にした。

「そういえば教授。俺の服はどうなったんですか？」

「もう教授じゃないから、トーマスと素直に呼んでくれ。で、あー。私も謎なんだが、服は全然転がって無かったよ。私が思うに、服は毛皮に変化しているのではないか、と考えている」

「なるほど。服のほかには、何か落ちていませんか？」

「近くにボロボロになった紙が落ちていたよ。さっき復元を終えた所だったんだが、あれはタロットカードだった。あれは君の持ち物なのかい？」

「はい。高橋教授に言われて、覚えました」

「はっはっは。あの男、まだそんな事を言っていたのか」

そこでわははと笑う。

表情を見て俺は、猫の表情がここまで豊かだった事を知った。そして、俺が猫になっていくせいも、もはや猫を猫としてではなく人としてみていることに内心驚いた。

猫に順応しているのか？

だとしたら、とんでもない魔法である。

「ところで、君は確か一人じゃなかったはずだが……」

「あ、香織の事すっかり忘れてた！！」

俺は慌てて立とうとして、転んだ。

すっかり忘れていた。俺って今、猫なんだっけ。

また歩き出すと、不思議と自然に四足で歩けた。恐るべし、魔法文化。

俺は出来るだけ急いで通風孔に向かって、止まった。

「道が分からねえ……」

結構間抜けである。

そんな俺を見かねたトーマスは「ユキに案内させよう。ユキ、案内してあげなさい」と、案内人（案内猫？）をつけてくれた。ありがとうトーマスさん。

ユキは静かに俺に近づくと、頭を少し下げながら言った。

「改めて名乗ろう。私の名は、ユキだ。よろしく」

俺も頭を下げながら、「俺は冬樹。よろしく」と言った。

お互い同時に顔を上げて、

「「あつ」」

思わず視線が合った。

か、かわいい…。

何故か素直にそう思った。どうやら、心の中まで猫になったらしい。

ユキもユキで何かを思っているようで、動かない。

気まずい沈黙。

そして何故か俺に注がれる殺気!?

どうやらユキはこの猫達のアイドルのようである。…って事は、こっち（猫サイド）でも結局ファンクラブに追いまわされるの!?

そんなあゝ、濡れ衣だよ…。

俺は殺されないうちに早く行こうと思った。が、体が動かない。視線が、ユキから離れないっ!?(やべえ、ユキってかなりの美人だ。猫としては)

それを見かねたトーマスは、「ほら、いつまでも見詰め合ってると日が昇るぞ!」と茶化して言ってくれた。

ユキは恥ずかしそうに目を背けると、「お前が『猫の肉球』で泊まっている事は調べてある。そこまで案内するからついて来い」と言っでさっさと行ってしまった。

少しの間ぽかーんとした後俺は、「ま、待って!」と叫んで外に出た。

ちなみに俺はそれからしばらくの間、慣れない猫の体で一生懸命ユキを追いかける事になった。

5

香織は悩む時、あごを摩りながら歩き回る癖がある。

香織は困ると、頭を抱えながら歩き回る癖がある。

香織はイライラすると、腰に手を当てながら歩き回る癖がある。でも、こんな姿は初めてだ。

香織は階段に腰掛けて、今にも泣き出しそうな表情でうつむいていた。時々思い出したように肩を摩り、その手に息を吹きかけていた。右手で何かを握り締めているらしく、手をずっと握っている。

俺はそんな香織を見て、胸が苦しくなった。

「どうした？」

ちなみに、隣にはユキがいる。

「いや、何ていうか……」

言葉が見つからない。とりあえず、「意外で、さ」と言っておいた。

俺たちは今、『猫の足跡』のすぐ近くにいる。入口前の階段で香織が座っているのを見かけて、思わず止まってしまったのだ。

ユキは、そんな俺を見て

「どうした」

と簡潔に聞いた。

俺は、どうすればいいのか迷っている。今にも泣きそうな香織に、俺が猫だと知れたら……。

そんな事はしたくない。

「どうしよう……」

俺は思わずユキを見て言った。きっと情け無い顔だったと思う。

ユキは静かに俺を見て、こう言った。

「知らん。そういう事は自分で決めろ」

まあ、そーだろーね。

「でも、しいて何かを言うなら、」

え、何？

ユキは俺の目を見て言った（俺、ちょっと照れる）。

「今のお前を見て、『フブキ』だとすぐに思うのは無理だと思うぞ」

俺はそれを聞いて、何か解決策を思いついたような気がした。だけど、まずは

「いや、俺は『冬樹』だ」突っこんでおく。

ユキはちよつと目をそらして、

「東洋人の名前は言いにくい。だから、お前はこれからフブキだ」

「え、そんな勝手に名前を変えるなよ」

するとユキは突然、「この村で一番偉い猫は誰か知っているか」と聞いてきた。

俺は当然分らないから

「知らない」

と応えると、ユキは

「この村で最年長の猫は私の父だ。だから、私の父が一番偉い」

と言った。そしてそこでにやりと笑って、

「私の父が一番という事は、私はこの村では二番目に偉いのだ。だから、私がお前は『フブキ』だと言ったらお前は父が何か言わない限り『フブキ』だ」

と言った。そのあまりの論理に俺は呆然とした。でも本人は真面目そうだから、とりあえず渋々頷いておく。

「それで、フブキはこれからどうするんだ？」

「……んー、どうしよう」

俺はタロットカードを出そうとして……粉碎したのを思い出した。

たまには自分で考えろって事か。

俺は少しの間考えた後、ユキにこう言った。

「とりあえず、何もしないのもアレだから何かしてくる」

「何かって、何だ」

「分かんない。でも、何かをしてくる。何かしなきゃ」

そう言って、俺は香織の足元に駆け寄った。そして一言「香織」と言った。多分、「にゃあ」と聞こえただろう。

香織は静かに俺の方を見ると、静かに、どこか辛そうに微笑んだ。

「あ……猫さん、こんにちは」

良かった。こっちは何を言っているのか分かる。俺はこちらの言葉が届いているのか確かめているために、あえて「香織、今日の晩

御飯は何だった？」と訊いてみた。

香織は静かに微笑んで、「うん、大丈夫だよ。ちょっとね、ある人を待っているの」と言った。会話が噛み合っていないから、どうやらこちらの言葉は分からないらしい。

まあ、予想の範囲内だな。

俺は香織の後ろに回って背中を爪でカリカリした。すると香織は「え、どうしたの？」と言って振り返った。急いで俺はドアの前に立って言った。

「風邪ひくぞ、早く中に入れ」

聞こえてないだろうけど。でも香織は何が言いたいのが分かったらしい。静かに笑うと、

「うん、でも、もう少しだけ。きつともうすぐ帰ってくるから……」  
と言ってまた階段に座った。

その背中の、なんと寂しげな事か。

俺はまたカリカリしようと思ったが、やめた。香織はきつと言う事を聞かないだろう。

俺は急いで香織の膝の上に乗って、通路を見るようにして寝転がった。

「猫さん、君も待つてくれるの？」

「いや」

って言ったけど、とりあえず動かないでおいた。どうせ「にゃん」としか聞こえていないのなら、『もちろん』という意味で捉えてもらえるように寝ていたほうがいいかなと思って。

それにこの膝の上は、ひどく調子がいい。

俺が少しの間膝を堪能してから、ふとさっき出てきた通路を見た。ユキの姿は見えなかった。きつと帰ったのだろう。

と、香織が「くしゅん」とくしゃみをした。俺はそれを見上げてから、急いでドアの前に走った。

「……へへ、もうそろそろ中に入ったほうがいいよね……」

そう言うってから香織はもう一度大通りの方を見て、ドアをくぐっ

た。

俺も、帰るに帰れないので（ユキいないし）とりあえず中に入る事にした。

香織はその俺の姿を見て、今度は楽しそうに微笑みながら「私の部屋に来る？」と言った。

俺はとりあえず「にゃん（おう）！！」と鳴いた。

香織は廊下を歩きながら、笑って「おいで」と言った。

俺は香織の後ろを歩きながら、ホテルの暖かさを堪能した。

6

どうやら、外を歩いているうちにかなり冷えてしまったらしい。

手足がしびれて上手く動けない。

猫にもそういうことがあるんだなー、と変な所で感心してしまう俺。

ホテルの部屋の中は、おれが出た時とあまり変わっていないかった。変わったと言えば、香織ベッドの上に広がったレポートの数々か。

俺が何のレポートか見ようとベッドの上に乗ると、香織は「ああ、駄目だよ。汚れちゃう」と言っただけ俺を床に降ろした。そういえば俺、足を洗ってないんだっけ。

足を洗おうかと思っただけ周囲を見渡してみただけ、良さそうなものは何もなかった。

しょうがない、洗面台で洗うかな。そう思って洗面所に入ろうとすると、後ろから「あ、猫さん。足洗うから、そこで待っててー」という声が聞こえた。

ま、いつか。よく考えたら蛇口回せるかわかんねーし。

ふと蛇口はどんなタイプなのか気になって、洗面台に飛び乗ってみた。

蛇口は、三つの取っ手があつてまわすタイプ。こりゃあ、猫じゃ無理だ。手でも足でも尻尾でも。

俺はとりあえず体勢を直そうとして足元を見て……絶句。

茶色い猫の足跡がくつきりと残っていた。ホテル『猫の足跡』に残る猫の足跡。

あははー、笑えねー。

仕方が無いから洗面台で動かず待機する事に。

やる事がないから、周囲を見渡してみる。

部屋の形はおおよそ正四角形。そのうち半分はバスルーム（湯船＋シャワー。ホテルの定番）になっていて、防水用のプラスチックのカーテンで区切られていた。そして残りの半分に向かい合うように洗面所とトイレ。何ていうか、少ないスペースで無茶して作ったって感じた。

そうやって渋谷バスルームを見てみると、香織の

「ごめんね猫さん、待ったー？」の声。

結構待ったと言おうとして、絶句（絶句してばかりだな俺）。

香織は全裸＋タオル巻き！？

急いで逃げようとしたけど香織が胴体をキャッチりがっちー！

もといがっちりキャッチー！

じたばたする俺を連れて湯船へ。俺はもう目をつぶっているほか無く、タオルが投げ落とされる音を聞いて完全に思考は真っ白。ああ〜れえ〜。

メーデーメーデー、本船はただいま暴風に襲われております！！うわ、お湯が頭から！！あ、あつたけえ〜……あ、そこは、くすぐりたい！！ちよ、や、めーっ！！

「あははっ、ほら、くすぐりたいから暴れないで」

うおおおおッ！！ちよっと、ちよっとぐらいなら……？うが！！めが、目がしみる！！こ、この匂いはシャンプー！？

「あれ、蛇口どこだっけ？」

ぎゃー、早く流して！！もう見ようとか思いませんかから流してー

！！目に、目に染みるー！！

くぶにゅ >

「きやつ もう、暴れないでっ」



今俺にどこに触ったの！？まさか、マサカツ！？

略。

ひとしきり暴れた後空腹のせいでダウンした俺は、今お湯の張った湯船に香織のなすがままになって浸かっている。状況を説明すると、それほど大きくもない湯船に、香織が横になって浸かり、お腹の部分に俺が仰向けになって抱きしめられている状況だ。

いや、程よく暖かい。そして、この程よい枕が<sup>ハイ</sup>いい気分<sup>ハイ</sup>にしてくれる。

「ばんばんばんばんばん」

香織が歌い始めたあの歌に合わせて、俺も合わせて歌った。

「あんばんばんばんばん（にやにやんにやんにやんにやんにやん）」

「」

香織は少し驚いて、「頭いいねー、君」と言って頭をばんばん叩いた。

「そうだ、君に名前を付けてあげよう」

突然何がしたいんだ……って、よく考えたら香織が何かをする時はいつも突然だったな。

「そうだな、真つ白な毛並みだから……」

ユキは使用済みだぞ。

と、ちよつと俺の体を探って……っつあああ！？

「オスかぁ、それじゃあユキちゃんは使えないか」

香織、後で覚えてろよ！！

「それじゃあ、君の名前は……」

顔が赤いのはこの、温泉成分がそのまま出てくるお湯のせいだろうか。

「フブキ君！！」

俺は思わず啞然とした。俺はまたフブキかい！！

香織は言った。

「フブキ君、私が待ってたのって誰だと思う?。」

「俺だろ? (にゃ?)」

「一緒に今日、この村に来た、先輩……先輩って分かる?。」

「知ってる (にゃん)。」

「えっとね、自分より学年が上の、って学年っていうのは……えーっと、学校が……あうー」

「おいおい…… (にゃあ……)。」

自爆かよ。

「えっと、とにかく先輩なの。冬樹先輩っていうんだよ」

「やっぱ俺だよな (にゃーん)。」

「へへ、フキとフブキ。似てるでしょ」

それはついさっきユキに言われた。

「俺は冬樹だ (にゃにゃん)。」

「何でそんな名前を付けたのかって?。」

言われてみれば。

「何でだ? (にゃん?)」

「へへー、実はね……」

そう言っで、急に真顔になって俺を抱きしめた。

「私、先輩の事好きなんだ」

「何い!! (にゃが!!)。」

## パート7〜9

7

何ですと！？それは、ま、マコトデスカ！？

「えへへ、始めて口に出して言っちゃった。えへへ」

香織は照れている。

俺は思わずビリビリしびれて、もう何も言えない。

香織は、静かに言い始めた。

「初めて先輩と会ったのは、実は学校に入る前だったんだあ……」

ま、前？

「あれは、高校三年生の夏休み。家が近いから今行ってる大学に行こうかなーって思ってたんだけどね、その時になって何学部に入るうかつて思ったの。とりあえず学力を上げる事に専念してたから、その頃には指定校推薦で入れる事が分かったの。それでその夏休みに、オープンキャンバスとお祭りが同時やってね、私そこに行つたんだ。凄い有名なんだよ、うちの学校。だから周りから受験生が一杯来てね、大変だったんだ。建物の中だけじゃなくて外でもいっぱい出し物やってたんだー」

あ、何となく思い出してきた。たしか俺はその時『魔法倶楽部』として、快晴の下、灼熱地獄状態の空間で手相占いをやってた先輩のサポートをしてた記憶がある。自給1000円で。二日間で合計20時間働いて、二千円。結構割に合わないと思った記憶もある。

「その日は凄い晴れでね、ものすごく熱かったの。私は友達と二人で歩いてただけど、その友達つてば帽子を持ってくるのを忘れててたんだよ。しかも結局倒れそうになったから、私は帽子を貸して木陰で休ませたの。それで、ジュースを買おうとしてお祭りの中にいったの。その時にある店で、私が後ろに並んだら『急いでいるならどうぞ』って前を譲ってくれた人がいたの。それが、先輩との初めての出会い」

あの時って確か、先輩の目を盗んで（あまりにも熱いから）ちょっとジュースを買おうと思って並んだ所、ダッシュで現れて『つめたいジュースあります』という看板を見るなり後ろに並んで慌てて財布を探ってた女の子が後ろに並んだから、慌ててそう言ったっけ。

あれって香織だったのか。そのときの事はよく覚えてる。だって、「へへ、前を譲ってもらったのはいいんだけど、慌ててたせいか私くらゝってしちゃって。そしたら先輩、しっかり支えて『大丈夫ですか？』って言うてくれたんだよ。しかも、先輩が被ってた帽子を私にかぶせて『水でいいね？』って言うて、急いで『3つ』水を買ったんだよ。何故分かったのって聞いたら、にっこり笑って『魔法使いですから』だって。それから私をお姫様抱っこして、友達の所に連れて行ってくれたんだよ。あのときの先輩、本当に格好良かった……」

ああ、そうだったっけ。

ちなみに。何故三つだと思ったかと言うと、飲み物の看板を見て慌てて買おうとしてたから多分友達のために買おうとしてるんだな！と思った。それだけの事だ。

「私、楽になつてから先輩を探したの。でも、どこにもいなかった。それから、仕方がないから帰ろうとしたら急に呼び止められたの。」

『あれ、それって冬樹の帽子じゃねーのか？』って。私思わず、「その、冬樹さんという人は何学部なんですか』って聞いたの。その時、民俗学部だって分かったの。そしたらその人は『返してこようか？』って聞いてきてくれたんだけど、何でだろ、その時『自分で返すから、いいです』って言ったの。へへ、まだ返してないけど」

あー。あの帽子なくしたと思ってたんだけど、実はずっと香織が所持してたのか。

「その時から、かな。『冬樹先輩』って寝る前に何度も練習したり、魔法の勉強を始めたの。大学に合格して、二月ぐらいに図書館利用が出来るようになったら、私毎日通ったの。でも、一度も会えな

った」

そりゃあそうだ。俺はその時、英語の講義（上野教授が、『あまりにも英会話が駄目すぎる。英語の筆記はかなり良いのだから、ちよつと鍛えればすぐに上手くなる』と言って始めた、個人レッスン。ちなみに、長期休み中はこれでほとんど潰されている。今期間も受ける予定だった。ありがとう高橋教授）を受け始めた頃だからな。忙しくてそれ所じゃなかった。わはは。嬉しくね。

「でも、部活動勧誘の時にまた会えたんだよ。あの時は本当に嬉しかった。もちろん、魔法倶楽部に入ったよ。『冬樹先輩』じゃなくて『先輩』って呼ぶようになったけど。タイミング逃しちゃって」

そこで香織はちよつと止まった。どこか悲しそうな顔だ。

「先輩、彼女いないんだって」

「まあ、いないけど（にやにやん）」

また沈黙。

「せっかく旅行に二人つきりで来たのに」

「そうだったな（にやんにやがにやん）」

また沈黙。

「もしかして先輩って、ホモなのかな」

「ほ、ホモ！？（にや、にやん！？）」

「だって、二人つきりなのに何もしないし」

「えー（にやー）」

だって、流石にこんな時に後輩に手を出したらまずいだろ。

「それとも、私って、女として魅力内のかなあ……？」

「そ、それは無いぞー！（にや、にやーっー！）」

俺は思わずひっくり返った。お腹に四足で立って、叫んだ。

「香織は魅力的だし、可愛いし。俺だって、俺だって、気にしてない訳じゃないんだ。っていうか、手を出したら間違はなく死の危険がファンクラブから飛んでくるから手を出せないだけだよ。でも俺だって、気にしてるんだ。格好よく見せようと常々頑張ってるし、

っていうか単刀直入に言うなら、俺は香織が好きだ!!」

風呂場に響く、猫の叫び声。

うわ、む、むなし…。

妙な空白感で突っ立っていると、香織はニコツと笑って言った。

「慰めてくれてるんだ。ありがとう、フブキ」

俺は一声、「にゃん!!」と叫ぶと、急いでバスタブから出た。

「ふ、フブキ!？」

香織が驚いている。俺は洗面所の上って思いっきり体を動かして水を飛ばし、落ちているタオルで急いで体を拭いた。そしてロックされていないドアを開いた。

「どうしたの、フブキ!？」

香織は全裸のまま(何て刺激的な!!)急いで出てきた。

俺は急いでダッシュ。窓を少し開き、外に飛び出た。そして地面に安定した着地。さっすが我輩は猫だ。

窓から香織が顔を覗いた。

俺は見上げて叫んだ。

「俺は戻る!!すぐに戻ってきて見せる!!冬樹で、ここに!!」

言葉が通じないなんて関係なかった。

俺は叫ぶと、急いで走り出した。

外は暗くて寒い。だが、心は妙に熱かった。

8

コケコッコー!!

「この村にも鶏、いるのか?」

「東に養鶏所がある。たまに食べる」

クックドウルドゥー!!

「食べるって、鶏をか?」

「いや、卵料理をだ。この村では猫は神格化されているらしくてな、猫の姿をしている限り食べる所、寝る所には苦労しないぞ」

「はは、そうなんだ」

コツケドウルドゥー!?

外はまだ暗い。でも、時間的にはもう朝だ。

俺はあの後必死に記憶を手繰り寄せ、どうにか俺が倒れていた建物に到着。必死でよじ登って部屋に入ると、中にはあるうことか誰もいなかった。

しばらく啞然としてから急に我に帰り、急いでまた外に出た。とりあえず大通りに出て、そのまま駅のほうに向かって歩いていたら建物の影でユキを発見。今、『うまい朝食をくれる店』に二人で歩いている所だ。

ユキは俺の事をしげしげと眺め、言った。

「お前、よく歩けるな」

「はい？」

「いや、今までに猫になった人間はお前以外、猫になつてすぐは上手く歩けなかったんだ。だが、お前はすでに普通に歩いている」

「え、そうなんだ……。そういえば、トーマスさん以外にこの村に猫になった人はどのくらいいるんだ？」

「私が知っている限り、25人だ」

「25人もいるのか!？」

素直に驚いた。分かっているだけで25人も猫になっているなんて。

いや、よく考えたら妥当な数字かもしれない。この村には魔術文化の何かがある事は、特に有名でもない学者の高橋教授でも気がついたんだ。他にも何人も人が気がついてもおかしくは無いだろう。それにしても、今までに25人以上もの学者がみんな猫になったなんて……ん？

「ちなみに、トーマスさんは今いくつだったわけ？」

「父上は今、47だが、それが何か？」

何かが変だ。この村では猫は神格化されているのだろうか？

だとしたら、丁重に扱われて長生きしてもおかしくは無いはずだ。だとしたら、学会でも『若き魔術研究学者』と言われているトーマス

マスさんが、何故最年長なのか？

「ちなみに聞くが、『猫になった人たちは』この村のどこにいるんだ？」

ユキはちよつと言い方を考えてから、俺の方を見てこう言った。

「村の北の土の下」

「……………それって、死んでるって事じゃん！！」

「ああ。約半数は猫になった事に発狂して死んだ。残りの4匹は病死、3匹衰弱死。2匹ほど、変化した事を誰にも気付かれず凍結死」

「はは、そんな死に方しなくて良かった」

思わず苦笑い。流石に、そんな中途半端な死に方はしたくない。

ユキもちよつと笑いながら、「私もそう思う」と言った。

ここで、『32』と書かれた通路を曲がった。

「ただ、8匹ほど、運動神経が足りずに死んだ」

「運動神経って、歩けなかったって事か？」

「いや、正確には……………」

ユキが突然立ち止まった。耳をぴくぴくさせている。

俺はここで「どうしたの？」と聞く事をせず、とりあえず耳を澄ませてみた。

家の中で人々の会話する音がかすかに聞こえる。他には何も……………

…ん？

「雪を踏む足音？」

俺は本当に小さな声で呟いた。

ユキは俺のことをチラツと見ると、「そのまま続けて言ってみろ」と小さな声で言った。

「足音なんだけど……………人の足音じゃない。規則的に、四本足で動いている。でも、猫の足音にしては大きすぎる気がする」

「上出来だ」

ユキは微笑みながら言った。

「で、どうした方が賢明か、言ってみろ」

俺は必死に考えた。そして、その特有の呼吸音を聞き取って、一



言。

「やっぱり猫って、犬に会ったら逃げた方が得策か？」

『はっはっはっはっはっ』という口で呼吸する犬の音がする。しかも、どう考えてもこれは大型犬の音だ。

「99点満点だぞフブキ。残りの1点は……」

ユキは足を後ろに少し戻しながら言った。

「疑問系じゃない。逃げないと死ぬぞ……」

ユキは後ろに全力疾走を開始。俺も横に並ぶように走る。

と、後ろから『ばうっばうっばうっ……』という犬の音が……！

「振り向くなフブキ……」

大通りに出て、一気に右折。駅がかすかに前方に見える。

ユキは全身のばねをフルに使って直角に右折。俺はちよつと大きく曲がつて右折。『34』の通りに入る。

入る寸前に、一瞬だけ犬を見た。

全身真っ黒で、夜の闇に同化していてよく見えない。瞳は赤く爛々と鈍く光り、白くて鋭い牙が生えていた。

パツと見、目と牙しか見えない。

こ、怖ええ……！！

ユキは前に広がるオープンカフェの入り口に迷う事無く飛び込んだ。俺も急いで、入り口に向かってジャンプ……！

つと、妙な怖気を感じて尻尾を思いっきり引いた。その空間を犬が横に噛む音。

うおおおお、し、死ぬ……！！

俺は転がるように店内へ。そして目の前には立ち止まったユキが……！！

「だぁ……！！」

「きゃあ……！！」

ごろごろ絡まって転がった。そして、俺がユキを押し倒すような形で停止。

「はぁ、はぁ、はぁ、な、な、な？」

「落ち着け、はあ、もう、大丈夫だ」

俺は息を切らせながら入り口を振り向いた。

犬は消えていた。まるで、元々いなかったように。

はて……？

「どうなってるんだ？」

そう言ってユキを見た。

すると何故か、ユキは顔をほんのり赤らめていた。

そこで気がついた。

あ、猫だから気がつかなかった。

俺、今ユキを押し倒している状態なんだ！？

顔が異常に近いせいか、ユキの瞳は静かに潤んでいる。

「……………っ！！」

何も声に出来ない甘い雰囲気。

それを破ったのは、ごつい人間の男の声だった。

「おいおい、おちびちゃん。突然店に飛び込んでラブシーンたあ、

ここはホテルじゃねーぞ？」

男は爆笑し、俺は硬直し、ユキはきよんとした。

9

「ほう、よく生き残ったな。今まで奴に襲われて、生き残った元人間は一人もいないぞ？」

「褒められてるんですか？」

「褒めてるんだよ」

空はほんのり明るくなってきた。雪がちらほら降り始めて、今以上に村を白く染め上げようとしている。

俺とユキはあの後、ごつい店主にぬるいミルクを御馳走になり、今度は『3』の通路の建物レストランの2階ロビーでトーマスさんと会った。

そして、妙なものに襲われたと報告したらこれだ。

トーマスは目の前にある湯気の出るミルクを眺めながら言った。

「そいつを、我々は『グリム』と呼んでいる」

「グリム……って、まんま死神犬ですね。黒いし犬だし」

「うむ。奴は、満月の夜の前後に活動する習性がある。だから、我々は満月の夜の前後1日は家の中に常にいる」

「家の中に？……そういえば、家の中に入ったらグリムは襲ってこないんですか？」

「うむ。何故かグリムは、『猫しか襲わない』のだ。人間にはもちろんの事、建物にも傷をつけたことは無い」

「え？」

「さらに、奴はどこに生息しているのか分からない。この村の誰もアレを飼っていないし、突然現れて突然消える」

「はあ？」

そこでユキが言った。

「全く意味不明な奴だが、奴に八匹殺されている。それだけは判明している」

「……ああ、運動神経って、そういう事か」

「その通りだ」

なるほど。街を一人で歩いていたら、間違いなくあいつに殺されるな。

と、そこでちょっとした疑問が。

「あれ？そういえばユキ、俺と会う前は一人で歩いてたよね。確実に逃げ切る自信が？」

そこで、トーマスが静かに口を開いた。

「今日は、満月の日の三日前だ」

「えっ……」

ユキは言った。

「私も意外だった。今まで、満月の三日前にグリムが出てきた事は一度も無い」

「え、そうなの？」

「偶然近くに逃げ込むには便利な店があったから良かったが、そうでなかったら間違いなく死んでいた」

「……マジかよ」

俺が啞然としていると、トーマスさんが器用に爪で湯葉を引っ張りながら言った。

「何かが変わろうとしているのかもしれないな。何なのかは分からないが」

そう言いながら、湯葉をゆっくり口に運んだ。

「うーむ、この湯葉は相変わらずうまいな」

湯葉、好きなんだ……。

俺は幸せそうに湯葉を食べているトーマスさんをそのままにして、ユキに尋ねた。

「それじゃあ、もうこの家から出ない方がいいのかな」

「そうだな。死にたくなければ外には出ない方がいいな」

「はあ、参ったなこりゃ」

とか言いつつ、俺は両手を前に伸ばして大きく伸び&あくびをした。

するとユキが、

「昨日ほとんどは寝てないのだろう？私が見守っててやるから、安心して少し寝たらどうだ？」

と言ってくれた。

「んー」

言われてみれば、眠い。時差ぼけも治ってないし、ここは大人しく寝ているほうがいいのだろう。

「それじゃ、そうするよ」

そう言って店の隅に言って、ごろんと横になった。すると、ものすごい睡魔が襲ってきた。あー、俺疲れてたんだなあとか思いながらウトウトしていると、ユキが目の前にやってきた。そして静かに優しい声で

「おやすみなさい」

と言った。俺も静かに、ボーっとしながら

「おやすみ」

と返事をした。

ユキから、不思議といい香りがした。

そしてすぐに、何ていうか、ちよつと幸せを感じながら眠りに着いた。

## パート10～12

10

足音が聞こえた。

俺はぼんやりしながら目を開いた。

どのくらい寝ていたのだろうか、外はもう夕日に染まっていた。ま、昼間がとても短いから大体今は2時ちょっと前ぐらいだろう。俺が起きたのに気がついたのか、ユキがこっちを振り向いた。

「気分はどうだ？」

まるで新妻みたいだな、とか不謹慎な事を考えながら体を点検してみた。

嘘みたいに疲れとかが取れていた。

「随分、いい感じだよ」

そう返事して、体を伸ばした。

うーん、快調快調

ずっと見守ってくれていたのか、ユキは俺が寝た時とあまり変わらない所にいた。

俺は笑って、ユキにありがとうと言った。するとユキは照れたように、  
うに、

「気にするな」

と言った。その仕草が何とも可愛らしく感じるのは、俺が猫だから？

俺がちよつと疑問を感じたその瞬間だった。

「あーっ、フブキー!!」

元気な香織の声ッ!?

ユキが驚いて一歩下がった隙に、香織は俺のことを無造作かつ見事に捕まえた。

「こんな所で何やってるのー?」

俺を視線の高さまで持ち上げて言った。

俺はとりあえず、「寝てた（にやにゃん）」と言った。

案の定通じてないらしく、香織は「猫語、分かんないなー」と苦笑いしながら言った。

そこでユキが

「おい、そいつは一体何者だ？（にや、にゃーご？）」

と俺に聞いてきたから、俺はとりあえず

「俺の後輩。一緒に遺跡の研究をしに来た仲間だ（にゃん、にゃにゃにゃんにゃん）」

と言っておいた。

少しすると、香織は何を思ったか、俺を降ろしてこう言った。

「フブキ、それとそこにいる白猫ちゃん。ちよっと、コレ見てくれない？」

そう言って、コートの右ポケットを探し始めた。

何かと思つてユキと並んで少し待っていると、香織はしゃがんで握り締めた右手を俺たちの前に出した。

「いい、見てて？」

ゆっくりと開いたその右手には……

「あつ（にやつ）」

「これって俺の（にやにゃん）！？」

見覚えのあるタロットカードの破片があつた。

「これって先輩が常に持ち歩いているタロットカードなんだ。それが、今朝遺跡に行つてみたらボロボロになつて落ちてた。きつと遺跡で、先輩の身に何かがあつたんだ。そうに違いないよ」

おお、正解だ。で、俺は目の前にいるッスよ。

香織はタロットをポケットに戻して、続ける。

「そこで君たち、冬樹君見なかつた？」

目の前にいるぞー。

「冬樹は目の前にいるぞ（にや、にゃにゃん）」

ユキが変な顔をしてとりあえずの返事をした。無論、分かるはずが無い。

香織は香織で、「知るはずないよね」。はあ……」とか言いながら窓側のテーブルに疲れたように座った。

俺は、自分がどうすればいいのか分からない。

俺、もう猫だし。

そんな俺を見て、ユキが「ちょっと来い」言っただけ歩いていった。

俺は何なんだと思いつつながら、雪の後をとことこついていった。

香織は、まだうつむいている。

11

ユキについて行ってついたのは、店の倉庫だった。

そこでユキは俺に向き直り、開口一番こう言った。

「お前は、人間に戻りたいのか？」

俺はユキを見て言った。

「うん。俺はまだ、やり残した事がたくさん残ってるから。それに、香織のあんな姿をもう見たくない」

ユキは静かに、どこか悲しそうに頷いた。

「そうか」

丁度いいから、俺はユキに聞いてみる事にした。

「そういえば、猫から人間に戻った人はどれくらいいるんだ？」

ユキは冷たく言い放った。

「ゼロだ。誰一人として、人間に戻れた猫はいない」

「えっ、マジかよ」

「冗談ではない。話が伝わっている限り、猫になったら猫で生涯を遂げている」

「じゃ、じゃあ、戻ろうとした人は？」

「ほぼ全員だ。人間の時の未練を追い求めるが、結局人間には戻れなかった」

「そんな……」

俺はもう人間に戻れないのか？

これから一生、猫のままで生きるのか？



俺の心中を悟ったのか、ユキが安心させるように言った。

「フブキ、あまり悲観するな。猫も悪くは無いと、父も言っている」

「……そりゃま、そうかもしれないけどさ」

「香織とかいう女が心配なのか？ だったら、彼女も猫にすればいい」

「いや、そういう問題じゃないと思うけどな……ん？」

何だろうこの違和感。何かを見逃しているような……

ユキは突然考え込んだ俺を心配そうに見て、「どうした？」と聞いてきている。

何か、何かを見逃している。考えろ、考えろ。違和感を感じた言葉は、香織を猫にする、か。……香織を、猫にするためには……香織を遺跡に……。

そこで、疑問が解けた。

「そうか！！」

「わ、ど、どうした！？」

突然大声を出した俺に驚いたユキに、俺は言った。

「何かが変だと思ったんだ。香織は、俺のタロットカードを持っていた。それに何より、遺跡に行ったと言っていた。なのに、『香織は猫になっていない』んだ」

「そういえば、そうだな」

「何故だろう……俺と香織の違いは……年齢と、性別か？」

「いや、それは関係ないと思う。確か以前、研究者とその娘が来た事があるんだが、その時は2人とも変身したらしい。その娘さんは人間年齢で16歳だった」

「香織は20……年齢とか性別じゃないか。それじゃあ、一体何だろう？」

「身長体重は関係ないだろうし……」

気がついたら2人で悩んでいた。

お互い同時にその事に気がついて、顔をお互い同時に向け合って笑った。

どうやらお互い、物事がはつきりしないと気が済まない性格らしい。

「おや？どうしたんだこんな所で、楽しそうに」

トーマスさんはひよっこり顔をドアの向こうから出して言った。

「え、いや、トーマスさん。ちょっと聞いてくださいよ」

俺が香織の件を話すと、トーマスさんは首をかしげた。

「たしかに、不可解だな……血液型かな？」

「俺も香織も同じA Oですよ」

「星座はどうだ？」

「俺は獅子、香織は水瓶です」

「おや、わしも水瓶だ。それじゃ、これも違うか…まさか、生命線とか？」

「流石にそんな訳無いと思いますよ？」

「だよなあ」

うーん、と悩む俺とトーマスさん。

と、ユキが何かに気がついたように言った。

「フブキ。そういえば、タロットって何に使う道具なんだ？」

「え？」

「ユキ、タロットというのは占いの道具……ああ、そうか！..」

「分かったんですか、トーマスさん！？」

トーマスさんは俺の方を振り向いて言った。

「私が猫になった時も、そういえば壊れたんだよ」

「え、タロットがですか？」

「違うよ。私が壊されたのは、60進法の電卓だ」

「え？」

そこでトーマスさんはにやりと笑った。

「私は『占星術』をたしなんでいたんだよ。ちなみに、他の学者も様々なものを破壊されているよ。『トランプ占い』の学者はトランプが粉碎していたし、日本人学者のある人は日本の『お守り』が壊されたし、ある学者は魔法陣の書かれていたタリスマンを破壊され

ている」

「え、それってまさか!？」

「何で今まで気がつかなかったのか知りたいぐらいだ。あの遺跡の仕掛けはきつと、『魔法的な何か』に反応しているんだ」

「ああ、香織は魔法の知識はあっても技術はまだ無いから」

数カ月後からは高橋教諭に言われて占いを始めるだろうから、コレは結構ラッキーだったのかもしれない。

トーマスは苦笑いしながら言った。

「プロフェッサー高橋の『占いは魔法と関連がある』という学説は、案外当たっていたんだな」

俺も苦笑いするしかなかった。

と、ユキが冷静に言った。

「結論を言つと、香織は猫になれない。それはいいんだが、結局お前は どうするんだ？まだ人間に戻りたいのか？」

あ。

そうだった。問題は全然解決してないんだった……。

1  
2

元々は、六泊七日の予定だった。

今日は三日目。香織が帰るまで、残り四日。

たった四日で、今までどの学者も見つける事の出来なかった人間に戻る方法を発見するのは、はつきりいつて無茶だと思う。だが、やらずにはいられない。

姿は猫になつても、心は人間なのだ。

そうは言つても、現実つてのは甘くない。何しろ、解決の鍵が一つも無い。いや、気がついてないだけかもしれないが。それでも、現状はヒント無しだ。

はつきり言つて、望みは絶望的なまでに低かった。何しろ桁が、小数点なのだ。最小値はとりあえず二桁までまでを望む。

「参ったなあ……」

俺は結局店の中をぶらぶらするしかなかった。

何も思いつかない。何かヒントでもあればなあ……。――

どっかの看板に書いてないかなあ。『ヒント：人間に戻るためには、精霊の剣が必要だよ』とか、何か。

んなもん、ある訳ねえって。

って、よく考えたら猫になっってから看板が何故か読めなくなっただった。もはや未知の記号にしか見えないんだよなー、アルファベツトが。

トーマスさんは覚えなおしたから普通に読めるみたいだけど。

俺はふと顔を上げて、店のメニューを見てみた。やっぱり変に読めない。

「P...A...S...T...A。パスタ。スパゲッティか」

こんなざまだ。

「何だ、文字の勉強でもしているのか？」

ユキが後ろにいた。

俺は思わず

「っていうか、ユキってなんだかんだで俺の傍にいるね」

って呟いたら、ユキは何故かちよつと焦りながら

「まあ、お前は仮にも猫初心者だしな。見守ってやろうと思っただけだ」

と言って視線をそらした。何なんだ一体。

でもまあユキは物知りだし、頼りになる女性（何より美人！！）だから悪い気はしないけど。

その時、外からシャム猫が慌てて入ってきて、頭を下げてユキに言った。

「ユキ様。西の『14』番でジエイとメイが喧嘩をしています」

「分かった、すぐに向かう。フブキ、ここで大人しくしている」

ユキの反応はものすごく素早かった。報告を聞くなり端的に言葉を残して走り去った。俺が返事をする間もなかった。さすが二番目に偉い猫。人間が違うなあ。いや、猫が違うなあ。

ふと気になってシャム猫を見てみると、息を少し切らしながらユキの行った方向から顔を戻し、俺のことを見て楽しそうに言った。  
「ユキ様って、いつ見てもめっちゃ格好いいよなあ。何ていうか、びしっとしてて」

その目は、子供のようにキラキラ輝いていた。  
俺もとりあえず、思ってる事を言っておいた。

「あー。俺会ってからまだ二日しか経ってないからよく分かんないけど、確かにカッコいいよな」

「だろ、だろ？」

シャム猫は嬉しそうに笑った。そして、少し頭を下げながら

「俺ジャム、年齢は4歳。始めまして元人間の、えっと？」

「あ、フブキだ。よろしく。……っていうか、本当はフブキじゃないんだけどね」

「え、そうなのか？」

「元々は冬樹っていうんだ。でも、呼びにくいからってユキが……」  
一瞬にして、目つきが恐ろしく険悪なものになった。まさか、フアンクラブの方ですか！？

俺は人間時代につかった反応力で急いで言い直した。

「ユキ様がフブキに変えたんだよ」

ジャムの目つきは元に戻った。こ、怖かった！！

「へえー。いいなあ、ユキ様に名前を付けてもらって。羨ましいぜ」

「あ、そう？」

そう言ったら、本当に羨ましそうな顔をした。

俺は知っている。この後少しでも放っておいたら、羨ましいのが恨めしいになる！！

「そういえば、ユキ……様って、どんな方なんだ？」

「え、ユキ様を俺に語れってか？」

地雷踏んだ！？

「え、嫌ならいいんだけど……」

慌てて言い直した。しかしジャムは聞いていないらしい。怒った

ような雰囲気をもとわせて、俺に言った。

「俺に、ユキ様を、語れと？」

「え、えっと!？」

やばっ。俺はまだ死にたくない!!

と、突然ジャムは満面の笑顔を顔に浮かべた。

「任せろ!!この村でユキ様をこれ以上なく語れるのは俺しかいねえ」

「は、はは。そうなんだ」

その気迫に思わず一歩下がる俺。

ジャムは気にせずに講義を始めた。

「ユキ様は、まず何といっても美しい。あの美しさは、まさに猫のグリーナスだ。あの美しさを生み出しているのは、俺は顔もちろんそうだがあの銀系の如く美しい毛並みだと思うんだ。そういえばお前も白いな。いったい何なんだお前!!」

「しらねえよ、気がついたら白かったんだよ!!」

「……まあ、それくらいはいいんだけどさ。で、ユキ様は美しいだけじゃなくて、賢いんだ。ユキ様の父上が元人間だからなのかは分からないが、この村の中では間違いなく1、2を争うほど頭がいい」

「ふむふむ」

「それに、運動神経もいい。村の猫の中では間違いなく一番足が速いし、ジャンプも高い。それでいてあのしなやかな体。たまらん」

「へ、へえー」

何ていうか、素直に一番最後の感想はいらん。

「そして何といっても、ユキ様は未だに恋人は愚か彼氏すら作った事は無いっ!!」

「それは……」結構どうでもいい情報だな。

「ユキ様はもう8歳。猫にしては高齢だし、何より発情期はとっくに過ぎているはずなのに。それなのにその体は未だ若々しいし、何より美しい。その不思議な所も、また魅力だと思わないかねフブキ君!？」

「はあっ!?!……あ、は、はい。思います」

「よろしい!!」

これは講義なのか?

「ああ、ユキ様を今にでもこの胸に抱きしめたい。そして、俺の子供を産んで欲しいぜ!!」

「ええっ!?!」

まさにダイレクト!!

まさか、猫の間だとそれが普通なのか?

ジャムはもう止らない。まるでブレーキの壊れた列車の如く進むジャム。

「ああ、叶わぬ願いだとは分かっている。だが、あの美しさの前に諦めは不可能というもの。いつか、見も心もユキ様と一体となって、そしていつかユキ様には俺の子供を産んで欲しい。これは猫として生まれたら当然の感情だと思わないかねフブぐはあ!!」

「誰がお前の子を産むか!!」

「ユキ!?!……様」

事件を解決してきたらしいユキが、全力の猫パンチでジャムを殴り倒した。人間的表現で言うなら、顔がもう真っ赤だ。そりゃあ、あんな事聞いたら恥ずかしくなるわな。

「ジャム。連絡はご苦労。だが、フブキに何を吹き込んでいる!?!」

「いえ、私はユキ様の素晴らしさをフブキに教えてててっ!!」

ユキは後ろ足でジャムの顔を踏み潰した。容赦なしだよ。

「余計な事はしなくていい!!」

「し、しかしフブキがユキ様の事を知りたいと」

「何!?!」

ユキが俺の方を睨んだ。俺は慌てて、

「いやほら、ユキ……様」

「様はつけなくていい!!」

その言葉にジャムがちょっとショックを受けたのがチラッと見えた。

「俺、ユキの事ほとんど知らないからさ。今まで何となく聞きそびれてたし。だから、第三者視点から見たユキの事を知っておきたいなあ〜って思ってた」

「……そうか」

そう言って足をジャムから退けた。ジャムは、何故か恍惚とした笑みを浮かべていた。

ま、まさか……いわゆる被虐趣味か!?

「ジャム、今回は大目に見よう。行け!!」

「は、はい!!」

ジャムは心ここにあらずのまま、名残惜しそうに駆け去っていった。

「……あいつ、本当はいい奴なんだ。だが、2年前から妙に私に絡んでくるようになってな」

ジャムが2歳の時から!?

ユキは、妙な気迫を持ったまま俺に聞いてきた。

「そつえばフブキ、奴から何を聞いた?」

「え、いや特に何も」

「言ってみろ」

俺はちよつと考えてから、素直に言う事にした。

「ユキは綺麗だとか、ユキは賢いとか、ユキは運動神経がいいとか、ユキは8歳なのに彼氏いないとか、ジャムが自分の子供を産んで欲しいと……か……です」

俺は失敗したと思った。

一番最後の所あたりでユキがまた真っ赤になって、また怒り始めたからだ。

「お、俺が言っただけじゃないって!!」

「うるさい黙れ!! お前には乙女心というものが分らないのか!」  
「?」

「いやほら、俺オスだし」

「ええい、うるさい!!」



ばしっ！！

ユキ渾身の猫パンチが見事顔面にヒットした。

これは濡れ衣だ、と思いながら俺はぶっ倒れた。

猫パンチって、こんなに痛かったのか。新発見だ……。

視界暗幕、意識混沌。

## パート13〜15

13

「……………ブキ……………フブキ……………」

「……………んっ……………」

目をあけると、泣きそうな顔でユキが俺の顔を覗いていた。

「フブキ、大丈夫か？怪我は無いか？頭はまだ痛いかな！？」

そう言いながら、少しずつユキの整った顔が近づいてきた。俺は本気で焦りながら

「だ、大丈夫だよ。問題ない」

と言うと、ユキは本当に安堵した顔になって

「よかった……………」

と言つて微笑んだ。

やべえ、マジ可愛い！？

俺は理性を急いで取り戻し、横に転がるようにして慌てて立ち上がった（四本足で）。そして、慌てて現状を確認する。

「ユキ、俺ってどのくらい倒れてた？」

「えっと、ほんの数秒ほどだ」

ふむ。

俺はドキドキする心臓を気にしないように、体を大きく伸ばした。と、突然店員が倉庫の中に入ってきた。

「おや、猫か。ほら、ここは倉庫だから入っちゃ駄目だ。しっしっ」男の店員が俺とユキを追い払おうとしている。

とりあえず、面倒を避けるためにユキと俺は大人しく倉庫から出る事にした。

カウンターから店内に戻ると、入り口近くのレジに香織がいた。どうやら、ご飯はもう食べ終わったみたいだ。ふと外を見ると、もう真っ暗だ。

「ふむ。今日はここに泊まっていた方がいいのかもしれないな」

ユキが俺が見ているものに気がついて言った。

「グリムのため？」

「ああ」

まあ、俺は別に反論する気もないから「そうだなー」と答えておいた。そして、何となく香織にとてとて近づいていく。ユキは相変わらず俺の右斜め後ろにいる。

店員が値段を言った。香織が財布を取り出してお金を出そうとして、

「おや、フブキ君？」

俺に気がついて、

「あ」

小銭を2枚ほど床に落とした。一枚はすぐに止ったが、もう一枚は外に転がっていった。

仕方がない奴だなー、とか思いながら俺はコインを追いかけて店の外に出て、コインを口にくわえた。

いい加減、猫に慣れ始めてるなあ。俺。

「フブキ、ナイス」

香織が俺を見て親指を立てた。いやあ、何か照れるなあ。

俺が店に戻ろうとすると、突然ユキが叫んだ。

「フブキー!!」

ん？

俺は急いで振り返……らずに店の中に全力で飛んだ!!

すぐ後ろから『グリム』の息が聞こえる。い、いつの間に!?

そして俺が跳躍したように、グリムも跳躍したっ!?

がぶ

「んがっ!!」

尻尾を噛まれた!!

そのまま店に転がるように……っていつか転がった。飛び込み前転みたいナ。

すると、グリムはすぐに消えた。文字通り、『消えた』。これは

一体……？

そして後に残ったのは……噛まれて血で赤くなった俺の尻尾。

「フブキ!？」

「フブキ!！」

香織とユキが俺の（猫になってからの）名前を叫んだ。

ちなみに、疑問系なのが香織だ。突然現れた犬の存在が謎なんだろう。

俺は自分の尻尾を見た。うわ、白い毛が赤く染まってる!!

「っへええー……!!」

コインを啜えているから変な声が出た。ちなみに、「ひえー」と言っただけ。

「フブキ、大丈夫か!？」

「いや全然、大丈夫じゃない。かなり痛いわ、これ」

そんな会話を交わしている間に、店員さんが大騒ぎし始めた。

「大変だ、猫が何かにやられた……のか!？」

「とりあえず、医者を呼べ医者を!!」

と、香織が言った。

「動物病院はどこにあるんですか!？」

「えっと、一番近いのは『7』番通路にあるぞ」

それを聞いた香織は即行動。俺をかなりの素早さで抱っこして、店の外に走り出した。

「お、お客さん、お勘定!!」

「あわわ、病院で払います!!」

全力でダッシュしながら香織が叫んだ。

俺はふと、グリムを警戒するようにして耳を澄ませた。聞こえるのは、店員さんの足音と、香織の息と足音。

グリムはいないようだ。

……何故？

結局、病院に到着してもグリムは現れなかった。

治療終了。

全治、三日の怪我だそうでした。

俺は自分の尻尾を見て思った。

治療のために毛を抜かれ、その上に包帯が巻かれている。

何となく、惨めな感じ。

「大丈夫？」

尻尾を動かすとまだ結構痛い。でも、それ以外は特に異常がないから、とりあえず「ああ（にゃあ）」と返事をしておいた。返事、大事。

香織は「よかった」と言って医者に礼を言っていた。

どうやら、この村では野良猫の治療費はタダらしい。さすが猫が神格化されている村だ。

初老のてっぺんハゲ医者にはこにこしながら「問題ないさ（ドンウォーリー）」と言った。

何が問題ないさ、だ。麻酔もなしに思いっきり傷口傷つけやがって。かなり痛かったぞコラ。

と、ひょいと香織に抱き上げられた。

「それじゃ、ありがとうございました（ウェル、テニキュウヴェリーマッチ）」

と言つて、香織は病院から外に出た。

俺は急いで耳を澄ます。

グリムは……いないみたいだ。

「わあ……」

「おや（にゃ）？」

空からは、静かに雪が降ってきていた。

今日の雪は適度な大きさで、どこか神秘的でもある。

道の左右にどけられていた雪の上にはもう、少し積もっている。と、一つの雪の粒がおれの頭の上に落ちた。

「わ（にゅ）」

それを見た香織が笑った。

「フブキって、本当に雪みたいな色なんだね」

「そお？（にゃん？）」

俺はふと気になって、聞いてみた。

「そういえば、これからどこに行くんだ？」

そこで気がついた。

俺、猫だつてーの。

「え、何？」

香織はやっぱり分かってない。

俺はどうにかジェスチャーで伝えようとして……気がついた。

グリムの息が聞こえる。

俺は慌てて頭を回して……見つけた。

大通りの入り口の物陰に、赤い瞳を二つ。

香織は気がついていない。

俺は無我夢中で香織の抱っこから体勢を直し、香織の肩に乗った。

「え、フブキ……あつー！」

前を向いて威嚇している俺を見て、香織も気がついたみたいだ。

グリムは、静かに俺を見ている。

と、突然グリムの口が動いて……

『罪人よ』

喋った！？

「お前喋れたのか！！」

『肯定』

「え？え？え？」

香織が一人で混乱している。きっと何言ってるのか分からないんだろうな。

グリムは続ける。

『罪人よ、貴様に問う。貴様は、まだ人に戻らんと欲すか？』

「当たり前だ！！っていうか、俺がいつ罪人になったっていうんだ！！」

少しの間。

『罪人よ、それは貴様が一番知っているだろう』

「……遺跡に立ち入った事か……？」

『答える義理は無い』

……やな奴。

『しかし新たな罪人よ、貴様は他の罪人に対して罪が大きすぎる』

「はあ！？ 何でだよ……！」

『答える義理は無い』

……むかつく奴だな。

『故に、我は貴様を殺さんとする』

「だから、理由を分かりやすく言いやがれ……！」

『答える義理は無い』

素直にむかつく。

と、グリムがちよつと違う調子で話し始めた。

『だが貴様が猫のままでいようと誓うのなら、我は貴様を殺さないだろう』

「はあ？」

『さあ言え。「我はもう人に戻る事を望まぬ」と。さもなければ、殺す』

「ちよ、ちよつと待て……！」

何なんだこの犬のような何か……！

突然現れて人間に戻らないと誓えと？

……そういえば、大体何でそんな事を言わせるんだ？

まるで、『言わなければ戻れる』と言っているような……って、

もしかしてそういう事なのか……！

俺はグリムに警戒しつつ、考え始めた。

考える。何が、何に繋がっているのか。もしかしたら、人間に戻る方法の鍵があるかもしれない……！

まず、今もっている情報を確認しよう。

・猫になるためには、魔法の力の所持が必要。その際、魔法の道具は壊れる。

・魔法の力を持たない者は変身しない。

・満月の夜に近くなるほど、グリムはよく行動するようになる。

・そして、どうやら俺は『罪』が他の人に比べて大きいらしい。これの意味はまだ分からない。

・猫が神格化されている村。なぜそうなのか……まだ謎だ。

・グリムは人を襲わない。この理由も、よく考えたら不明だ。

・猫になったら様々な感覚が猫そのものになる。言語情報、美的感覚、味覚、歩行方法、身体感覚、聴覚。

・遺跡に刻まれていた謎の模様。読めない。

・猫と元人間猫で、子孫を残す事が出来る。……って、これはどうでもいいか。

・「我は人間に戻る事を望まぬ」と言うと、何かが起こるらしい。

・そして何より、（今まで誰も成功していないが）人間に戻る事はどうやら可能のようだ。

何か、謎を解く鍵があるはずだ。

何か、人間に戻るヒントが……！！

どれだ、どれなんだ……？

15

グリムは黙って座っている。

当面の問題は、こいつをどうするかにかかっている。

香織がいるお陰か、グリムが襲ってくる気配は無い。だが、あまり安心は出来ない。いつ襲い掛かってくるか分からないし。

それと、グリムは本当に犬的行動以外は何も出来ないのか。それもおきたい。

俺は少しの間考え込んで、どう動くか決めた。



「おい、グリム」

『……宣言する気になったか？』

俺は、警戒を解いて言った。

「なんねえーな。俺、人間に戻りたいし」

『……よかるう。ならば、死んでもらうしかない』

そう言つて、低く唸り始めた。

普通に怖い。

「フブキ……どうしよう？」

香織が困った表情で俺をちらりと見た。俺はそんな香織の柔らかな頬を前足でそつと押して前を向かせ、静かに「にゃあ」と鳴いた。

「えつと、……行けつて事？」

「そつ（にゃあ）」

失敗すれば即死だなあゝとか思いながら、香織の肩で静かに前を向く。

グリムは、始めの位置から少しだけ動いていた。

俺は叫んだ。

「走れ（にゃあ）！！」

「っ！！」

気迫が伝わったのか、香織は走り始めた。グリムが道を塞ごうと横に飛ぶ。

「止るなッ（にゃあッ）！！」

「きゃ！！」

目の前に立ちふさがったグリムに、香織は見事に立ち止まった。

あちゃ、流石に上手くないか。さて、どうする！？

『罪人よ……』

その瞬間、耳に妙な音が響いた。上？

『覚悟は……』

どすつ。

見ると、グリムに大きなツララが刺さっていた。いや、正確にはそうじゃないな。

グリムという影を貫いて、地面に刺さっていた。  
まさか……こいつって、実体が無いのか？

そういえば、雪が振っているはずなのにあいつは黒いままだった。  
もしかしたら、あいつには実態が無いのかもしれない。

だとしたら、尻尾を噛んだのは何故……？

グリムはツララを見て、慌てて横に飛んだ。

「今だ（にや）……！」

「んっ……！」

香織は走った。グリムの横をすり抜けて、大通りに出た。俺は尻尾で香織に方向を指示した。

「こっち？」

何ていうか、香織の飲み込みが良くて、すっごく嬉しいよ。

香織は大通りを広場の方に曲がって走り続けた。

そして、しばらく走って後ろを振り向いてみると……グリムは追って来ていなかった。

ちよつと安心して、香織は立ち止まった。

「はあ、はあ、はあ……ふうー。久しぶりに走ったかも。それで、フブキ。君はどこに行きたいの？」

「えーっとな……」

って言って気がつく、香織に言葉は通じないというコト。全くもって不便だ。

俺はちよつとため息をついて、前を指差した。

香織は苦笑いしながら、「はいはい、こっちな」と言っただけで歩き始めた。

と、突然反対側の肩にユキが降り立った「おととと……！」。

「あいつ、ツララをすり抜けていたな」

「そうだな……って、あれやったのユキ？」

「無論だ」

「なんだか、肩に二匹も猫を乗せてる女の子って私だけじゃないかな。やっぱ」

「ありがとう、助かった」

「で、どこに行くつもりなんだ？」

俺は自分の考えをユキに説明してから言った。

「とりあえず、目的地は遺跡だ」

## パート16～18

16

遺跡に近づくにつれて香織の顔が不安げになっていった。

前を照らすのは、香織のライトだけ。もう、すっかり夜だ。

俺とユキはずっと香織の肩に乗っている訳にも行かず、香織の後についていくだけにしている。だが、それもなかなか大変になってきた。雪が少しずつ積もってきているのだ。

要するに、足が冷たい。

それを誤魔化すついでに俺は情報収集している進行形。

「じゃ、やっぱり誰かが変身した後は石版の文字は消えるのか」

「正確には、ちょっと違うな。あれは、人間が近くにいないと浮かび上がらないらしい。詳しくはよく分からないが、変身後には文字が無いのは事実だ」

「ふーん、そうなんだ」

グリムは、あの後二度ほど存在を感知した（っていうか、あの息使いを聞いた）。だが、襲ってくる事はなく、町の外に出たら一度も現れなくなった。何か制限があるのだろうか。

「文字が浮かび上がるなんて、魔法みたいだな」

「魔法なんだろう」

「……やっぱ魔法だよなあ」

「やつとついたあ……」

香織のその声に、俺たちは会話を中断。脇を通るようにして、前に出てみた。

降り積もる雪のせいで真っ白になっているが、間違いなくここは遺跡だ。

俺は急いで中央の台座に近づいて、側面についている雪をどけ始めた。あんまり角度が無いお陰か、上をどかせば連鎖反应的に雪が崩れ落ちた。そして、

「……よし!!」

表面には文字が浮かび上がっていた。そして予想通り、猫になった俺はこの模様のような文字が読める。どうやらユキも読めるらしく、「確かに読めるな」と言って静かに頷いた。

ただ香織だけは文字が分からないらしく、頭の上に?マークを大量に浮かべている。

……何ていうか、分かりやすい奴だな。

まあ、それがいい所であり悪い所でもあると俺は思うのだが。

「……フブキ、何処を見ている」

「へ？」

香織を見ましたッ!!

なんて言えない。っていうかユキが俺の事を睨んでいるのは何故!?

「え、えつと、何て書いてあるのかな?…えつと、『王国に反逆する者よ。汝、この地で猫に生まれ変わり、終わり無き罪をつぐなえ』……だつて。あ、罪人ってもしかしてこれに何か関係してるかもしれないね!？」

「何を誤魔化そうとしている？」

ユキが怪訝そうに俺を睨んでいますますが気にしない方向でOK?

俺は台の上に乗って雪を掻き落とし始めた。すると香織は、「フブキ、それ面白い?」と言って雪を下ろし始めた。なんだか妙な誤解もあるみたいだけど、やっぱり人間の手は猫の手より仕事が早い。あつという間に台座の雪はあらかた落とされた。

俺はさっき読んだ面の右側の面から順番にに書かれている文字を読み始めた。

文章は和訳すると以下の通りだ。

『天におられる我らの母よ、満ちる時に少しばかり力を分けたまえ。されば我々は罪人を捕らえ、正義の裁きをかの者に与えん』

『罪人よ、汝らの罪が汝らを苦しませ続けるだろう。悪魔の力などに頼った汝らの報いなのだ。だが、全ての罪を悔い改め、悪魔の力を全て放棄するというなら、母が満ちる時この台に登るがいい。事の真偽を裁者が確認した後、それが真実ならば元の姿に戻るであろう』

『だが、罪を悔い改めずに台に上らんとするならば、覚悟せよ。たとえ人に戻ったとしても、すぐにここへ戻されるだろう。お前は罪を背負っている限り烙印を押されている。我々の兵からは逃げられはしない』

「これは……」

思わず笑みが浮かんだ。『母』とは間違いなく月の事だろう。だとすれば、『月が満ちる時』というのは間違いなく満月の夜の事。

『裁者』はまだ良く分からないが、とにかく満月の夜にこの台に登れば……

「人間に戻るんだ……！！」

俺のその言葉を聞いて、何故か一瞬だけユキは寂しそうな顔をした。

そして香織は、台座の上で俺の事をじっと見ていた。

「……なんかいいことあったの、フブキ？」

あったぞ！！

17

その後、街に戻ったらいきなりグリムからの奇襲があったせいでうやむやのうちに香織と離れ離れになってしまった俺とユキは、一応の報告のためにトーマスさんの所に行った。

トーマスさんはまた湯葉をつついていた。

「ほっ？満月の夜か」

「そうなんです。だから、三日後にあそこに行けば……」

「だが、どうやって？」

「……グリム、どうしましょうか」

「うゝむ……」

満月の夜は、とぉゝつても危険だ。なぜなら、グリムが街をぶらぶら徘徊しているからだ。

っていつか、満月の夜に外に出る事は自殺行為だとも言われた。

むー、問題はグリムなんだよなあ……。

俺の目の前で考え込んでいるトーマスさんは、湯葉を食べながら、ぼつりと言った。

「やはり、グリムは『罪人』を人間に戻さないようにするために存在している、と考えるのが妥当か。そして、街や人々を攻撃しないのは、その『王国』が作り出したから、だろうな（食べながらだったため、聞きにくい部分は修正を施してみた）」

「そうだと俺も思います」

「ふむ……」

湯葉を飲み込んでから、トーマスさんが言った。

「とりあえず一番気になっているのは、グリムをツララがすり抜けた事だ。これについて、フブキ君。何か仮説を立てられるかな？」

俺もそれは気になっている。そこで、日本で読んだりした漫画や小説を参考にして考えを述べてみた。

「えーっと、まず『実体化できる瞬間は一瞬だけ』っていうのと。

もう一つは『歯だけが実体になっている』っていう考え方……ですかね」

「ふむ、なるほど……」

「ただどちらも、『体を貫いているツララをわざわざ回避する』理由にならないような気がするんです。それに、あいつには足音があります。だから、両方違うとしか思えません」

「ふーむ……そういえば、さっきまた奇襲されたと言ったな。どんな感じだった？」

「え、えーっと……いきなり横から吼えられて、慌てて近くの店に

飛び込んだ……だけだったね、そういえば」

「ん」

ユキが静かに返事をした。

そういえば、あの時はグリムの姿を見てなかったような気がする。これって……？

「もしかしたら、グリムは存在するだけで消耗しているのでは無いでしょうか」

「ほう？」

「そう考えれば納得が行きます。台座で満月の日に何かを補給して、次の満月まで動く。そして、基本的にいつもはどこかでひたすら消費を抑えて、そして満月周辺の日になると動き始める……多分、あいつの存在は影で保たれているからこそ夜にしか活動できず、今日の朝俺を襲った時に消費しすぎて、つららを通してしまっただけに消耗していたのではないだろうか。あの時は、実はツララを避けたのではなく、慌ててライトの当たらない影の位置に移動したのだとすると、納得がいきます。その後の襲撃はまったくと言っていいほど脅し程度のものでしたし、足音もしませんでした」

「なるほど。そうなのかもしれない」

ユキも同意している様子。思い当たるふしがあるのだろう。

「だとすると、満月前日までは一安心、といった所かな」

「そうですねー」

そう言つと、何だか疲れがドツと出てきた。頭を使いすぎたせいだろうか？

「ふぁー……眠い」

「それでは、そろそろ寝たらどうかね、フブキ君」

「んー、そうします。それじゃ、また」

とことこ歩いていると、後ろからユキが追いかけてきた。

「どこで寝るつもりだ？」

「あ、どこにしよう……香織ンとこかなあ、やつぱ」

「それじゃあ、ワ、私の部屋に来ないか？」



「へっ？」

何か一瞬だけ変に裏返ってなかったか？

「えっとだから、私は基本的にそこにいるし、待ち合わせ場所にもなるし、何かあった時はそこに来ればどうにかするし、だからとにかく来い！！」

「ふえっ！？あ、はい。行きます」

何だか妙な事になったぞ？

ふとそんな事を思いながら、俺はユキの後ろをついていった。

18

一言で言うなら、屋根裏部屋だった。

でも、ぶっちゃけ予想していたのよりはかなり良い。天蓋つきのベッドがあつて、布団の変わりに枕がいくつか置いてあつた。床には水入りのお皿があつて、壁紙がしつかり張つてある壁にはストーブが完備されている。お陰でなかなか暖かい。

「どうだ。野良猫の住家とは思えないだろう？」

「うん。っていうか、もはや猫の部屋ですら無いな。どうなってるんだ？」

「こここの家の主人が私がここで寝ていたのを発見してな、この通りだ。追い出さないし、むしろ暖かく迎え入れてくれる」

「へ、へえー……そいつあ、すごい。流石、猫が神格化されているだけある」

「それと、この家の主人はお金持ちだぞ」

「……狙ってた？」

「別に」

そう言つて、ユキはベッドに飛び乗った。白いシートに足跡がつく。もったいないなあ。

「寝るならここだ」

「え……うん」

別に指示されなくても、大丈夫だけどなあ。仮にも人間だった訳

だし。

とりあえずベッドに飛び乗って、枕の間で丸くなった。なるほど、布団が無いのはこういう理由からか。

で、

「ユキ……何してんだ？」

「見張り」

「……グリムは当分出ないだろうし、ここは屋内だし、大丈夫だと思っけど？」

「……気にするな」

「いや、めっちゃ気になるんですが。そんなジーツと見つめられちゃ寝れないって」

「……そうだな。それじゃ、私はどこかで何かを食べてくるとしよう」

「分かった。それじゃ、お休み」

「お休み」

ユキはベッドから飛び降りると、少しだけ開いている窓をくぐって、どこかに行ってしまった。

そこではようやく、一安心。だらーんと力なく枕の間に挟まってみる。枕の程よい重さが気持ちいい。

「ふうー……っ」

後3日、いや、起きたら残り二日か。結構暇な時間があるなあ。

その間何してよーかな。

ぶらぶらこの町を探検してみるのもいいかもしれない。

遺跡をもっと調べてみるのもいいかもしれない。

あえて何もせず、ごろごろしてるのもいいかもしれない。

「……何にせよ、明日決めるかな……」

時間はあるみたいだから、何をするのかは明日決めよう。そう考えた。

そして目を瞑って少し経つと、安心してゆっくりと眠りの世界に入ってしまった……。

## パート19〜21

19

目を覚ますと、ユキが近くで寝ていた。

俺は眠気も吹っ飛ぶほど驚いて、ああと思い直した。

よく考えたらここはユキのベッドなんだから、ユキが寝ててもおかしくは無いんだよな。

俺は床に飛び降りてから、体全体を伸ばすように大きく伸びをした。ちよつと尻尾が痛い。怪我は治りきつてないみたいだ。

外はうつすらと明るい。

さて、今日は何をしようか。人間に戻る方法は分かったし、よく考えたら他にすることないし。

そう思つて、苦笑した。

こういう話つて、大抵はこんなに暇な時間無いよなあ。限界ギリギリの時間に遺跡に到着して、グリムとの戦闘に辛くも勝利。そして無事変身完了とか何とか。

ま、こっちの方がいいけどさ。現実なんてこんなもんか。

そう思いながら、ストーブの近くに行った。旧式でどうやら灯油を使っているらしいが、猫のためにわざわざ設置するとは何てお金もちなんだ。

でも、とりあえず家の主人に感謝しつつストーブの前に行った。

暖気が細いヒゲを揺らす。

あー、猫も捨てたもんじゃねえな。

と、下から足音が聞こえてきた。

とたとたとたと。

子供だろうか。足音は軽く、どこか駆けている様な感じがする。

足音は階段を登り、扉を開けた。

扉の上に片足を乗せていた俺は慌てて移動し、扉を開けた奴は誰なのかを見た。扉を右手で上に押し上げながら左手にミルクの入っ

たお皿を持っていたのは、まだまだ小さな金髪のおガキ様・オスだった。

坊主は俺を見て、にこやかに笑いながらミルクの皿を差し出した。  
「ほらホーリー、ごはんだよ」

ホーリー？……この家の中でのユキの名前か？

……白だから？

少年はミルク皿を俺の目の前に置くと、そのままじっと俺を見ていた。

食えって事なのか？

人間のときにはあまり意識しないが、こうやって見られていると思うと妙に意識してしまう。

の、飲みにくい……。と、次の瞬間だった。

「クリス、こっち来て！！」

下の階から母と思われる女性の叫び声が聞こえた。

その声の調子に驚いたのか、クリスと呼ばれた坊主は急いで下に降りていった。何となく俺も興味も覚えて、ついていく事にした。

階段を下りて右に曲がって廊下をまっすぐ。螺旋状の階段を下りて玄関についてそれから左に曲がって辿り着いたそこは、リビングだった。

坊主が部屋に来て「ママ、何？」と言うと、大柄な女性はいきなり坊主に抱きついた。

「おお、クリス」

ぎゅー！！

「く、苦しいよ。一体何があったの？」

ちなみに、ここまでの会話は全て英語である。猫になった事で英語での会話も全て認識できるようになっているみたいだ。便利だな。クリスのママは、テレビ画面を見ながら言った。

「ほら見てよこれ」

猫になっているので読めませんッ！！

……あれ？あの宿屋って、『猫の肉球』だよな？

「ママ、何て書いてあるの？」

ナイスおガキ様！！

クリスママは深刻な顔をしてこう言った。

「凶悪な殺人犯がこの町にやってきて、あのホテルで日本人の……カオリ？とにかく、人質を取って立てこもっているらしいのよ。怖いわね」

20

うそだ。

うそだうそだうそだ。

そんな事はあるはずがない。  
だが。

テレビ画面に写っているのは、間違いなく宿屋『猫の肉球』だった。  
た。

俺は気がつくと全力で階段を駆け上っていた。

うそだ、だって、俺はようやく人間に戻る方法を見つけたのに！！  
もう少して、もう少して何の問題もなく人間になれたのに！！

うそだ、うそだ！！

何でこんな事にッ！？

何故だ      ツ！？

「騒々しいな、目覚ましにしては少々うるさいぞ」

俺はいつしか声に出していたらしい。ユキに突っこまれた。ごめんなさい

俺は屋根裏部屋に到着する頃には息が大分上がった。猫って不便だな。

ユキはベッドの上で無防備にごろりとなりながら、顔だけを俺に向けていた。

「……何があった？」

俺は急いで（というか焦って）ユキに説明をした。ユキは何度か頷くと、「おい、影」と呼んだ。

影？

「此処に」

「おわあ！！いつの間に俺の後ろに！？」

影と呼ばれた猫は、いつの間にか俺の後ろに立っていた。毛の色は漆黒で、まるで部屋の影の一部みたいな感じがした。

そんな彼（彼女？）にユキは命令した。

「影、話は聞いたな。『猫の肉球』に行き、状況を分析して私に報告しろ」

「御意」

「わ、って早！！かなり俊敏かつ高速な動きで俺の後ろに立ったり旋風を巻き起こしながら窓の外に消えていたりした今の方は何！？」

「私に仕える『影』だ。父は忍者と呼んでいたか」

「猫忍者！？」

とんでもねえ。

「な、何故そんなものが？」

「メスで下を従えるのは危険だからな。『影』がいる限り、オスどもは基本的に寄って来ない」

「防犯対策？」

「は、はあ」

俺は何となく頷きながらふと思った。

「って事は、あの『影』はかなりの戦闘能力を持っているのかな。」

「そっいえば、その、『影』っていうのは何人いるんだ？」

「今の所はあいつ1人だ。四年前から私に仕えている」

「ふーん」

「さいで。」

猫の社会も、簡単じゃないな。

「戻りました」

「うわ、早ッ！！っていうか何で俺の後ろにいるのかな？」

「ユキ様に不埒な振る舞いをさせないためだ」

俺も監視対象なんだ。

「影、どうなっていた？」

俺を睨む目を解除して頭を垂れた『影』は、淡々と状況を述べた。  
「宿屋の二階の一番奥の部屋で、異常に殺気立った人間の男が人間の女にパストル（ピストルの事。純粹に言い間違い）を向けていました。窓の外から見ただけなので室内の詳細は分かりません。窓は一つだけかすかに開いており、男はそこから店の前のパリス（ポリスの事。これも言い間違い）陣に要求を述べている様子。店の前には人間のパリス（略）が円形に陣を張っており、しきりにトランサーバー（トランシーバーの事。やはり言い間違い）で連絡を取り合っていました。野次馬やマサコミ（マスコミの事。わざとでは無いようだ）は、大通りに張られた黄色いテープ（テープ）の外にいました。以上です」

なんとまあ。

21

「なるほど……」

思ったより状況は緊迫しているらしい。とはいえ、何となく予想の範疇だったのはこれが現実だから？

ユキは報告を聞き終わると、ゆっくり頷いてから影に「ご苦労だった。下がっていいぞ」と言った。

「はっ……」

威勢良く返事したと思ったら、影は気がついていたら消えていた。

はー、まさかイギリスの地で猫になってから本物の忍者に合うなんてな。

俺がちよっと呆然としてみると、ユキは呟くように言った。

「……行くのか？」

俺の気持ちは、勿論YESだった。だから、俺はユキに「行く」と言って頷いた。

前回通ったルートは覚えてる。全力で走れば、数分でつくだろう。俺の頭の中はその時、どうやって香織を助けるか。それだけだった。

だから、気がつかなかった。ユキが表情を少しだけ曇らせた事を。「…行って、どうするんだ？」

「……分からない。でも、何かしなきゃ香織が撃たれるかもしれない」

「しかし、思い出せフキ。お前は今、猫なんだ。人間じゃない。そんなお前が、何が出来る？」

「それを今考えてるんだ。……そうだなあ、窓がかすかに開いてるって言ってたよね。そこから入るのがやっぱりミソになるんだろうけど、どう思う？」

問いかけてみたが、ユキは無言だった。

思わず、「……ユキ？」と訊ねてみた。すると、ユキはそっと呟いた。

「そんなに、香織という人間は、お前にとって大事な存在なのか……？」

……えっ？

ユキはベッドから起き上がった。そして静かに床に降り、俺の目の前に来た。

「なあ、どうなのだ？」

俺は何故か背をぴしっと伸ばし、何故か少しづつ後退した。まずい。何かがまずい。

まずいって訳じゃないけど、何かが嫌な予感がする。

俺が一步後退すると、ユキは一步前進する。

「か、香織は……その……」



じわりじわりと壁に追い詰められる俺は、若干混乱しながら返事をした。

「大事か、大事じゃないかって訊かれれば、そりゃ、大事……だよ」  
何で逃げてるんだろう俺!?

一方ユキは、気のせいかわ潤んだ目で（猫だからそう見える）俺を見ていた。いや、これは……見つめてる？

「フブキ……」

喉がゴクリ。

とうとう、背中が壁についた。ユキは、俺の目と鼻の先まで来てやっと止まった。

「……なあ、フブキ……」

美人、いや美猫に見つめられ、俺の心臓は急速に加速。心臓の音がユキに聞こえるんじゃないかって、どこぞの漫画みたいに思った。しばし、そのまま見つめ合う俺とユキ。

しまいには、

「……」

「……」

何も考えられなくなった。

言葉で言うなら、ユキが自分と溶け合うような感じ。

コーヒーマイルクが混ざり合うように……。

しばらくそのままだった訳だが、俺はある時ふと香織を思い出した。

あ……香織を助けないと……。

そうかすかに思った時だった。ユキがそっと顔を下げた。

え、あれ？

……泣いてる？

<ボコッ!!>

「がつ!？」

ユキが突然ボディブロー!?

俺はいきなりの攻撃を急所にまともに食らい、その場につずくま  
って悶絶。

き、効いたぜ今のパンチ……。

しかしユキは気にせず、窓の方にすたすたと向かいながら言った。

「ほら、何遊んでる。さっさと行くぞ!!」

「お、おー……」

若干ふらふらになりながらユキを追った。

窓枠に飛び上がったユキは、こっちを見て言った。

「ほら、さっさと歩け!!」

彼女の表情は、何故か

「お、おう!!」

寂しそつに見えた。

## パート22〜24

22

宿屋『猫の肉球』の前では、十数名の警官が強化プラスチックの縦を構えて円陣を組んでいた。

状況は変わっていないらしい。

「さて、どうするんだ？」

「どうしようか」

「……おい」

『猫の肉球』の目の前の建物の屋根の上。そこに、雪に同化するようにして座っている俺とユキ。

足の裏がちよっとちべたい。

「問題は、決定力なんだよ。見た感じ、室内に入るのは簡単なんだ。隣の建物からベランダ沿いに移動すればいいだけだからさ。だけど猫である以上、人間に決定打を与えるのが難しいんだよ。しかも、今回は一撃必殺じゃないと駄目だからもっと大変。どうするかな……」

それに、猫になったとはいえ生物だから、銃で撃たれたらひとたまりも無い。

興奮した犯人が香織を撃ったら、全く意味が無くなる。

これは……。

「困難だな」

ユキが呟いたのに対して、俺はそつと頷いた。

「さて、どうしたものか……」

いやはや。

参ったな。

こりゃ。

さて。

どうしょ。

んー……。

……。

「足の裏がちべたい……」

「おい。やる気あるのか？」

「あるけどさあ、さっぱり解決策が思い浮かばないんだよ。大きなツララでもあれば顔を出させればいいけどそれも無いし、部屋の中には鈍器はおるかシャンデリアも無いし……」

「……そうか」

いや、参った。

部屋の中にあつた物を振り返ってみる。

普通の電球。ベッドが二つに、引き出しが二つある小さな戸棚が一つに、大きなクローゼットが二つ。二度目に行った時に、俺の荷物は右のベッドの上に置いてあつた。中には、猫に扱える凶器は無い。

俺は、遠くに見える窓からじつと室内を見た。

室内に動きは無い。左側のクローゼットに背中を預けるようにして、銃口を右に向けている。

そっちに、香織がいるのだろう。

クローゼットを倒せれば……いや、流石にそんな事をしようとしたら気がつくだろう。

それに、クローゼットの中にはそんなに中身が無いはずである。香織を逃がす事の出来る時間があるかどうか……。

「犯人に動きは？」

「まだありません。依然、人質をとって立て籠もっています」

ふと、屋根の下辺りから声が聞こえてきた。

この下に警察、いたのか……。

「狙撃班か何かがいれば良かったのにな」

「こんな田舎にそんなのいませんよ」

いないのかよ。

「で、犯人の武装はどうなっている？」

「中国製の安い銃が一つだけらしいです」

「ちつ。アジアンめ、迷惑ばかりかけやがって」

おいコラてめえ。

……ん？

何か閃いたぞ？

「なあユキ。一つ聞いてもいいか？」

「ん？」

そして俺は、一言二言ばかり言葉を交わした。

ユキも、どうやら俺の考えを理解してくれたらしい。

「逆転の発想だな」

「まあね」

「よし、それでいこう。さっさと準備だ」

さて、ここで問題です。

俺はこれからどうするでしょう？

正解は、次回をお楽しみに

23

犯人は、素直に驚いた。

交渉用にわずかに開いていた窓から、白猫が入ってきたからだ。

まあ、要するに俺が窓から堂々に入ったって訳だ。ついでだから、

「にゃーん」

なんて鳴いてみる。

「……フブキ？」

香織は、コート姿で部屋の窓のすぐ右側にいた。何だ、そんな所にいたのか。

怖がっているようだから、とりあえず声をかけておいた。

「大丈夫だ（にゃーん）」

そうなんだよまだ猫なんだよ言葉は通じないんだよ。  
でも、言っておいた。気分の問題だ。

俺はトコトコ歩いた。犯人は、俺のことを凝視している。  
やはり、猫には大事な銃弾を使わないか。  
いざという時に使えないと困るからね。

俺は、歩きながらほくそえんだ。

本当は、今がその『いざという時』なんだけどな？

ポテポテ歩いて、俺は小さな戸棚の上に飛び乗った。  
そして犯人に一言。

「にゃーん」

ええ、どうせ猫ですから伝わりませんとも。

だから、尻尾で上の引き出しをぽんぽん叩いた。

「……何だ？」

犯人が動いた。

引き出しに向かって少しずつ歩く。

俺はただ台の上に乗って、

「にゃーん」

と鳴くだけだった。

たまに

「ごろごろにゃー」

とも言ってみる。

ちなみに、香織は違う意味の恐怖を感じているようで、表情がさ  
つきよりやバイ状態だった。

犯人が引き出しを引ける距離まで近づいてきた。

俺はそつと後ろに下がって、引き出しを開けやすいようにした。

男がいぶかしげに引き出しに銃を持っていない左手を伸ばす。そ  
して、引き出しを引こうとした。  
が。

「ん、何だ？」

ガタガタガタ。

アンティークの戸棚なのか、この戸棚は異常に調子が悪い。  
俺が人間の時に一度開けたが、その時は両手を使わなければ開けなかった。

犯人はそれに気がついたのか、香織に意識を集中しながら銃を俺の前に置き、両手で戸棚をガタガタさせながらぐいと引いて、中身を見た。

計画通りに。

犯人が中身を見た、まさにその瞬間。

「今だ（ニヤア）！！」

突然後ろでユキが叫んだ。

「な！？」

犯人が驚いて後ろを振り返る。その隙を見逃さず、俺は銃を戸棚の上から叩き落した。

男は、俺が銃を落としたことにすら気がついていない。

神経が参っていて、自分の視界にしか集中できないようだ。

銃は、自由落下して床まで一気に接近した。が、最高のタイミングで「影」が窓の反対側から現れてそれをしっかりキャッチ。全力でそれを運び始めた。

「行け（ニヤア）！！」

ユキが叫ぶ。

犯人はようやく気がついたようで、慌てて俺のほうを振り向く。そう。倒すのが無理なら、『無力化すればいい』。

影が、馬鹿みたいな筋力と瞬発力で窓まで銃を器用に運んでいく。

「Shit！！」

英語で舌を打った犯人は、慌てて影を追いかけ始めた。

だが、所詮相手は猫。知らず知らずのうちに手加減をしているせ

いで、追いつかない。

そして、『影』がとうとう窓の外に辿り着いた。

「地獄に落ちな、ベイビー」

あんな元人間たる絶対！！

そんなセリフを猫語で喋り、影は銃を下に落とした。

勝負、あり。

24

「アツキンキャッツ！！」

犯人は汚い罵声を影に浴びせた。ってか、キャッツだから俺とユキもか。

「銃が落ちてきました！！」

「今だ！全員突撃ッ！！」

下から、警官たちの声が聞こえた。

香織はどこか呆然としているが、どことなく安心したようだ。作戦成功を確信した俺は、うるたえる犯人を見てこう言った。

「チェック・メイトだ（ウニヤニヤ、ニヤー）」

ありきたりな上、猫だから絶対に通じていないと知ってても、何となく言いたかったから言った。

うーん、決まった。

「まだだ、まだチャンスはある！！」

犯人が、いきなり後ろのポケットから包丁を取り出した。

やばい！！

位置関係では、犯人を真ん中として俺と香織は一直線。香織に犯人が向かったら、何もできない！！

「させるか（シャーッ）！！」

影が素早い動きで犯人に飛びかかった。だが、

「邪魔だ！！」

「がっ（にやっ）！！」

犯人が振り回した腕が影に命中。体重差と、何より威力の違いで



影は簡単に吹っ飛んだ。

俺は、気がついたら走っていた。犯人の右を抜け、香織の元へ。  
「どけ！！」

犯人が俺を蹴飛ばそうとするが、俺は慌てて飛びのく。  
そのせいで、香織との間が一瞬とはいえ広がってしまった。

犯人は急いで香織の元に行こうとする。  
が、今度はユキが立ちはだかった。

「どいつもこいつも俺の邪魔ばかりしやがって！！」

「それが貴様の人徳という奴だろう」

ユキは、威厳たつぷりにそう言った。

いや、聞こえてないと思うぞ？

とか何とか思っているうちに、ユキは犯人の肩に飛び乗った。犯人は邪魔だとはかりに腕を振るうが、ユキは紙一重でそれをかわす。

「このお！！」

「わっ！！」

犯人は突然体を大きく振った。

ユキが慌てて飛びのく。そして着地する直前。

「死ねえ！！」

「ッ！？」

犯人は包丁をユキに向けて付いた。

死を呼ぶ刃は、着地した瞬間のユキ目がけて一直線に進む。

そこからはあまり細かく覚えていない。

気がついたら、俺はユキの前に立っていた。

あー、きつと痛いだろうーな。

ユキは、深刻そうな顔で叫んだ。

「フブキーッ！！」

ざしゅ。

俺に刺さった刃は、引き抜かれることはなかった。

なぜなら、次の瞬間

「Freeze!」

警官たちが部屋の中になだれ込んだからだ。

銃を向けられた犯人は、俺を刺した包丁から手を離し、両手を上に挙げた。

事件はこれでひとまず終結した訳、か。

香織、ユキ……無事そうで何よりだよ。

……何言ってるのか聞こえないや。やけにゆっくりだし。

あれ、左後ろ足の裏が冷たい……あ、これ俺の血か。

参ったな、こりゃ。

人間に戻るより、まず生きて帰れるのかな？

……でも、二人とも無事で良かった。

だからほらユキ、そんな深刻な顔するなよ。被害が猫一匹って、

ずいぶん軽いと思うぞ？

しかし、本当に、よかつ……

「冬樹 ツー!!」

## パート25〜27（ラスト）

25

気がついたら、船の上にいた。

小さな、本当に小さな船の上。

「おや、意思があるのかい？」

俺は、非常にだるい気分の中、どうにか返事だけでもしようとした。

「おー」

何とも中途半端な返事になってしまった。

「へえー。珍しいこともあるもんだな」

ぎいーこ、ぎいーこ船を漕ぐ音だけが聞こえる。

俺は、少しずつ意識を取り戻そうと思って、体を動かしてみることにした。

尻尾の感覚がある……ま、当然か。俺は猫だし。

「ところで、意思のある君。人間なのかい？」

何だって！？

俺は慌てて目を覚ました。まだ体は思うように動かせないが、俺は声のした方をどうにか向いた。

「あんた、俺が人間だって分かるのか！？」

「つていうか、到底まともな人間には見えないがなあ」

ん、どういう事だ？

俺は、体を少しずつ体の各所を動かしてみた。

尻尾、右足、左足、右手、左手、そして……指が、五本。人間のよう動いた。

「どうなってるんだ……？」

体をどうにか起こして、体を見た。

「な、なんじゃこりゃー！」

「気がついてないなら言うが、耳も猫だぜ」

「え、あ、本当だ！！俺、猫耳&猫尻尾ボーイになってる！！」  
なんてこつたい。某電化製品の町に行けば、すっかり溶け込んで  
しまいそうな格好になってる！

しかも、

「うわ、これ本物だ！！引つ張ると痛い！！」

カチューシャイらずで猫耳ボーイになってしまった！？

「だから聞いたんだ。お前は人間なのかって」

俺は慌てて後ろを見た。そこにいたのは、

「わあッ！？」

闇のように黒いローブに身を包んだ、黒い皮膚と羊の角を持つ青  
年が船を漕いでいた。しかも、周囲にはさまざまな動物たちが半透  
明で……って、俺も半透明だ！！

「失礼な。わざわざ人の姿をしてやっているのに、その態度はあん  
まりだ」

「どつどつ、何処！？ここは何処ー！？」

「何処って、黄泉の川」

「ぎゃー！！」

俺はあの後結局死んでしまったのかー！！

よく見ると船は黒いし、周囲の魂たちは目が虚ろだし、川のくせ  
に異常に深い水は紫だし！？

「戻してっ！！俺を元の世界にもどしてー！！」

「何馬鹿言ってるんだ。前回爽快に格好良く辞世の言葉残してたじゃ  
ねーか」

まさにその通りですが。

でも、前回とか言わないでください。

「意思の残ってる魂って事は、きっとそれなりに楽しく過ごせるぜ  
？」

「何処で？」

「黄泉の島で」

「何して？」

「そうだなあ。首吊り自殺の再現してみたり、魔女狩り時代の拷問受けてみたり、暇になったら俺の代わりに船漕いでみるとか？」

「いやだーっ！元の場所にもーどーせー！！」

「我俚言うなって」

俺は叫んだが結局、船から落ちたくないから叫ぶだけになった。

悪魔も、どうやらそれを楽しんでいる様子。

「戻して、俺を、元の場所にー！！」

「駄目だって」

『そこを何とか頼む、運び屋』

「わ、グリム！？」

グリムが黄泉の川を犬掻きで泳いでこちらに向かっている！？

っーか何でこいつが！？

俺を無視するようにして、グリムは話を続けた。

『彼の者は、命を張って罪人から善人を守る事で遺跡に認められた。故に、我はそれが人に戻るのを見届けねばならない』

えっと、それって、いい事したから人間に戻すために生き返らせろって事？

そんな無茶な交渉……

「仕方がないですね」

「通じたー！！」

不幸中の幸い、どうにか生き返れそうです？

『ほら、早く行くぞ』

「え？」

『早くしないと満月が沈むぞ？』

「えっ！？」

もうそんな時間！？

やばいやばい、早く帰らないと。

「って、どうやって帰れと！？」

『捕まれー！！』

俺は、急いでグリムの首に腕を回した。するとグリムは船から飛

び降り、馬鹿みたいな速度で川を逆そうし始めた。

犬掻きで。

『手を離すなよ！！』

「離れたらどうなるの！？」

「発狂する」

何があってもあなたを離しませんよ！！

すると、思い雲に覆われている空の中で唯一違う点。白く輝く空が覗ける、天使の柱が伸びている場所があった。

「あそこに行くの！？」

『肯定だ。あれを上り、現世に戻る！！』

グリムは、すごい速度で光の当たっている所まで辿り着いた。すると、信じられないことが起こった。

「浮かんでる、浮かんでるけど……腰を引っ張られてる感じ！？」  
はつきり言つて、やな感じ。

はじめはゆっくり、次第にびゅーん、とばかりに腰を何かに引っ張られる。

次第に雲の間に近づくに連れて、眩しくて目が開けられなくなつた。

『蘇りたければ、決して離すな！！』

「っていうか、何であなたは浮かばないんですか！？結構重いですよ！？」

もう、目はきつく閉じていた。そして少しずつ、グリムの重さの感覚がなくなつていった。

ん、何か聞こえる……？

『明日のイギリス北部の天気は、壮絶な吹雪でしょう』  
やめてよ、そっくりの。

26

だるい。

体がひたすら重い。

目を開くのも気だるく、声も

「うー」

しか出す気が無い。

そういえば、気のせいかゆらゆら揺れている気もする。

……果たして、さっきまでのあれは、夢だったのだろうか。

思えば、突拍子も無い話である。悪魔に魂を運ばれて、危うく死ぬ所だった……っていうか、あれが正しいのなら俺は一度死んだのか。

だが兎も角今は、生きているらしい。

包帯が体を締め付ける感覚が、痛いぐらいに（若干痛い）感じれる。

あー、生きてるって、こういう事なんだな。

…。

……あ。そういえば、何か聞こえる。

今まで雑音にしか聞こえなかったけど、何だろう。

「早くしろ!!」

「月が山の陰に隠れるまで、後何分だ!？」

『五分を切った。足を休めるな!!』

「トーマスさん、先輩の服持って来ました!!」

「よし、ついてこい!!」

……はい？

な、何か事情が読み込めませんが？

俺は気だるい気分を根性でどうにかして、やっとの事で目を開いた。

そこにあっただのは、

「冬樹!!」

「冬樹君!!」

「先輩!!」

『止るな!!』

総勢フルキャスト!?

気がつかないうちに物語は順調に進行していた様子。ユキを右肩に乗せ、俺を抱えるようにして走っている、赤毛の初老の紳士はやつぱり……?

「済まないが、先に元に戻らせてもらったぞ!」

「トーマスさん（にやー）!」

意外とナイスミドルだ!?

簡単にシャツとコートだけを羽織っているらしいトーマスさんは、息も荒く俺を運んでいた。

その右斜め後方。その方向からは、

「全く。先輩も、猫になったのなら何でそう言ってくれないんですか!?!」

「言えるか阿呆!! つーか言ったぞ!?!（にやにやーん）」  
どこかピントのずれた文句を叫ぶ香織。

逆に、左後ろ後方には、

『大丈夫だ。怪我は、元の姿に戻れば、たちどころに消える』  
「グリム!!」

罪人を裁く者、グリムが並んで走っていた。

少し周囲を見渡す。

建物の影は気がつけば消え、満天の星空と、沈みかけている満月の姿があった。

それと、今にも倒れそうなトーマス氏の顔。

「ヒュー、ヒュー、ヒュー」

「ト、トーマスさん。私が運びます!!」

気がついたら虫の息のトーマスさん。返事も無く、香織に俺を突き出した。

「行きますよ!!」

「おう（にやー）!!」

香織は俺を掴むと、雪の足場に負けずに走った。  
そして走りながら、香織は俺に話し掛けてきた。



「先輩!!」

「ん、何だ? (ニヤ?)」

「お風呂の件、後でじっくり話し合いましょうね!!」

「……」

そう来たか。

と、下から失笑が聞こえた。

「ユキ」

「自業自得だな」

「う」

今始めて、元に戻りたくないって思いました。

とか何とかやってるうちに、遺跡が見えてきた。

『台座に寝かせろ!!』

「はい!!」

香織にもグリムの声が聞こえたのか。

『今だけ特別に聞こえるようにしただけにすぎない』

「何で俺が心の中で思ってる事に、さも当然の如く返事できるんですか!？」

とか何とかやってるうちに、俺は香織の手によって台座に寝かせられた。

「結局、最後の最後までドタバタしてたな」

と俺がぼやくと、六本の柱が薄く発光し始めた。

『我は裁者。我はこの者の罪を認めた。遺跡よ、この者の姿を元に戻せ……』

グリムが呟く。

すると柱の間に青い光の幕が生まれ、外と台座を隔離した。俺の体は紋章が光る台座の上に浮かび、そしてあの感覚が再び俺を包んだ。

気持ちいいような、悪いような、痛いような、そうでもないような。そういう感覚。

と、突然外から声が聞こえた。

「冬樹!!」

……ユキ?

「これでお別れだな!! たっ、楽しかったぞ!!」

返事をしなければと思い、俺は宙に浮かんだまま返事をした。

「俺こそ、楽しかった!! ユキには、感謝してる!!」

「わっ、私もだ!!」

気のせいか、ユキの言葉にはいつもの威厳が無い。そう、

「これが最後の言葉になると思う!! 聞け!!」

それはまるで、

「私は……私は!!」

別れを惜しむ、一人の女性のようにだった。

「お前を……」

遺跡の出す音が徐々に大きくなり、ユキの声がどんどんかすれていく。

「これか……も……絶……に忘れ……い!!」

最後の言葉を聞き逃したくない。

その一心で、俺は耳を済ませた。

耳と聴覚に意識を集中する。

俺の耳が、聴覚が元に戻るまで……!!

「冬……私は……を……」

まだ、まだ戻らないでくれ!!

意に反して、体は徐々に元に戻ってゆき、神秘的な音は大きくなる。

「ユキッ!!」

そして、

「……ず……また……」

光が、弾けた。

27

「久しぶりだね、高橋。

私はあの町で、間違いなく私が捜し求めていたものを見つけたと思っ  
ているよ。

私は、魔法で猫になっていたんだ。私は、この身で、魔法という  
ものを体験できたのだよ。

まあ、冬樹君を見れば一目瞭然だと思うがね。  
私も猫になっていたんだ。本当ですよ？

所で、冬樹君は元気ですか？

私は彼の身が心配でなりません。

何しろ、あんな事になってしまったのですから。

私も、まさかあんな事になるとは予想もしていませんでした。

まあ、お陰で私の猫の娘は大喜びですがね。

香織ちゃんも、元気かな？

冬樹君が人間に戻るなり猛ダッシュで逃げて以来、結局ほとんど  
見てなかったからね。

まあ、憧れの先輩がいきなり目の前で全裸だったら、逃げたくも  
なるのだろうかね。

そういえば、高橋教授と私で提案していた『占いとは魔法である』  
という説が、本当である可能性が出てきたんだ。冬樹君から聞いた  
かもしれないが、猫になる時、占いの道具やお守りが壊れるという  
事が発生したからね。これで、研究がまた一歩前進するわけだ。

今度の夏休みにでも、日本に、研究の方針を決めるためと、二人

の事を見に行くよ。

ああ、今から楽しみだよ。でも、それまでは今回の事件で得た情報をまとめないかね。大学の方も色々溜まってるし。

それでは、また夏休みに会いましょう。

貴方の永遠の友人、トーマス・スターライト。（訳・香織）

追記：次の満月の日に、ユキを台の上に乗せてみるよ。成功したら連絡する。」

高橋教授から借りた手紙（を和訳した紙）を読み終わった俺は、隣に座っている香織に紙を返した。

そして、俺はため息をつきながら帽子の位置を直した。

「……なんだかなー」

「どうしたんですか？」

ここは、大学のキャンパス内にある丘の上にあるテーブル。長椅子二つに挟まれる形になっているこのテーブルの片方に、俺と香織は座っていた。

期末試験もどうにか無事完了し、明日からは休みだ。

俺は、どうにも調子の悪い帽子をいじりつつ香織に返事をした。

「結構慣れないもんだ、これ」

ちなみにこの帽子は、香織から返されたものだ。

自分のものとは違う香りがちよっとするのが、何となくドキドキする。

そんな帽子をいじっていると、香織は何かを思いついたようににやつと笑った。

「……何だよ」

「別に、何でもありません」

そう言つて、俺との間を一気に詰めた。

俺は一気にドキドキした。やはり、慣れない。帽子もそうだが、香織も。

「先輩……」

ふと、静かに目を閉じて香織の顔が急接近！？

「え、あ、ちよつと香織！？」

そう。

風呂事件の責任として、俺は今、こいつと付き合っている事になっている。

ま、まあ、恋人同士になったらキ、キスぐらいは普通なんだろうけど……。

「先輩、責任とつてくれるんじゃないんですか？」

悪戯っぽく下から覗き込んでくる香織。

俺は、

「だ、だって俺、まだそういうのは早いんじゃないかって思つな？」  
断然弱気。

はい、ヘタレです。どうせ俺はヘタレですよ。

つていうか、香織って結構積極的だ！！

そうしている間にも、俺と香織の間の空間は徐々に縮まって……。

「えーい」

すばーん！！

爽快に帽子を取られた。

「な、なー！！」

俺の頭と耳が、外気に晒される。

何故か色が元に戻らず、銀色のままの髪の毛。

そして、頭にびよこびよこ生えた猫の耳。

ただの耳じゃない。猫の言葉を理解する事の出来る耳なのだ。

あの時、必死に聞こうとしていたせいか、満月が変身中に欠けてしまったせいなのかは分からないが、とりあえず俺はあれから猫耳ボーイになってしまった。

尻尾が無くて良かったと、最近は諦めている。

で、そういうのは問答無用で目立つから、普段は帽子を授業中も深く被っていたのだ。ちなみに、全先生公認。

俺は慌てて香織から帽子を取り返そうとする。

「可愛いじゃないですか」

「でも嫌なの!!」

「何ですか?」

「絶対に目立つから!!」

当然だ。

そして、香織が帽子を上にした時

「よっ!!」

やっと帽子を掴んだ。

が、罨は二重だった。

気がつくと香織の顔が目の前にあった。

「先輩……」

……なんだか、最初から最後まで香りに振り回されっぱなしの気が……。

でもま、それでもいいや。

倒れた俺の鞆の外ポケットから滑り落ちた、カードの山。

それは、先日購入しなおしたタロットカードだった。

落ちた衝撃で、箱からカードが一枚飛び出した。

そのカードは、『世界』。

意味は、ハッピーエンド。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0337d/>

---

猫の肉球！～ねこのにくきう～

2010年10月8日15時02分発行